

結城友奈英雄伝説

アレクサンデル・G・ゴリアス上級大
将

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝国暦1511年。

銀河帝国とバーテックスの戦いは150年もの長きにわたり続いている。

建国当初の規律も統制も失った帝国軍と、戦力逐次投入の愚を冒し続け質の低下を招いていたバーテックスの戦争はイゼルローン回廊とフェザーン回廊で膠着状態に陥っていた。そんな中、一人の英雄が現れる。

彼女の名は

結城友奈

- I はじまりの章 テーマ曲『Skies of love』
- II 星乱の章 テーマ曲『Tranquility』
- III 大満開の章 テーマ曲『CRY』
- IV 花結いの章 テーマ曲『エガオノキミへ』
- V 回天の章 テーマ曲『Sea of The Stars』
- VI 風雲の章 テーマ曲『I Am Waiting For You』

目次

プロローグ	1	師弟対決	51
I		キフオイザー星域から愛を込めて	58
はじまりの章		勝利、そして悲劇	67
我が征くは星の大海	4	終幕、さらば友よ	81
第4次アスターテ会戦（前編）	10	我が友	92
第4次アスターテ会戦（後編）	17	ジークフリード・キルヒアイスは勇者である	101
英雄と 友と 部員達と	25	III 大満開の章	
カストロプ動乱	32	胸に	
II 星乱の章		立ち止まってはられない！	116
悲劇の幕が上がる・・・	41	不思議な夢	122
		IV 花結いの章	

会いたい・・・ | 128

番外編 1 どっちがどっち？

135

番外編 2 バレンタイン | 139

番外編 3 キルヒアイス提督の日常

| 147

第二次キフオイザー星域会戦 |

自分との戦い | 172

V 回天の章

違う世界へ | 185

美姫へブリュンヒルトへは血を欲す

190

VI 風雲の章

番外編 皇太子手記 |

プロローグ

宇宙暦305年

人類統一政体たる銀河連邦の腐敗が進む中、宇宙各所で突然現れた謎の生命体による民間船攻撃が多発する。

当然銀河連邦軍がこれらの対応にあたるが、政府同様規律も統制も欠いた連邦軍は各所で惨敗する。

だがそんな中、宇宙暦306年。ガンダルヴァ恒星系管区司令官たる乃木若葉大佐率いる艦隊が3倍の数で攻めてきた生命体を各個撃破戦法で完膚なきまでに粉碎、名声を得る。

この軍功により乃木大佐は僅か14歳で少将に昇任。

人類史上最年少の将官記録を更新する。

その年の内に軍を退官、銀河連邦政府議員選挙で自ら作つた政党『国家革新同盟』に属する手下の議員を大量に送り込み政界を手中に収めた。

勢いに乗り不文律ながら禁止されていた大統領と首相の地位の兼任禁止原則を法を逆手に取り兼任し議会から『終身執政官』の称号を与えられ、ついに宇宙暦310年、

自らを神聖不可侵たる銀河帝国皇帝に即位。

この年を帝国暦1年とし乃木王朝銀河帝国が誕生した。銀河帝国が成立するまでの4年間でバーラト、マル・アデッタ、ドーリア、バーミリオン、ランテマリオ、ガンダルヴァ、エル・ファシル、シヴァ、シャンプール、アスターテ、ダゴンの各星系が陥落し人類はその版図を大きく失った。だが銀河帝国が成立し柔軟で迅速かつ規律厳しい若葉大帝の知己の提督達の活躍によりこれ以上の生存圏縮小は免れた。

特に前線を陰ながら兵站面で支えた軍務尚書 上里ひなた元帥

宇宙艦隊司令長官 高嶋友奈元帥

統帥本部総長 伊予島杏元帥

宇宙艦隊副司令長官 土井球子上級大将

のチームの連携は凄まじく、フェザン星系において宇宙艦隊の精鋭を配置し、イゼルローン回廊には駐留艦隊2万隻と出力9億2400万メガワットのX線ビーム砲『トールハンマー』を備えたイゼルローン要塞を建設。防御、攻勢どちらも可能にすべく体制を整えた。

だがここで予想外の事態が起こる。

帝国暦12年、まだまだこれからだと思われた若葉大帝だったが、急に体調を崩し帝国内部は大混乱に陥る。そんな中若葉大帝は病身を押し直々に政府全職員の前

で訓令する。

『余がここまで来れたのは卿らの協力も大きかったが、余が力を振るえたもうは地の神の皆々様の御加護、予言あつてのことである。我らを脅かすかの生命体共は我らを恐れ、天の神が差し向けた刺客へバーテックスである。地の神の皆々様は其奴らから人類を守りまいらす為、余に力を与えたのだ。地の神々を奉るべし。余に与えられた力は、予言は、勇者を選ぶ力は余の血を引く者達に引き継がれるだろう。』

そう訓令した僅か3ヶ月後、銀河帝国初代皇帝 乃木若葉は30歳で崩御。その治世は僅か11年であった。

I
はじまりの章

我が征くは星の大海

帝国暦151年 5月 アスターテ宙域

帝国軍 遠征艦隊 旗艦 『プリユンヒルト』 艦橋

「・・・星を観ておいでですか。」

「うん。星は良いよジーク。どんなことにも動じず、同じ所で瞬き続け、私達を見守ってくれてる・・・どうしたの?」

「偵察隊から報告が入りました。陛下からの予言通り敵は3個艦隊、およそ4万隻。我が軍を包囲すべく三方より接近中です。」

「第一次ダゴン星域会戦を再現するつもりみたいだね敵は。今までなら通用しただろうけど・・・。」

「我が艦隊の足なら包囲される前に各個撃破が可能です。ですが指揮権を盾に強行はなるべく避けとう存じます。意識統一の為に諸提督を一度集め会議すべきかと。」

「・・・シユターデン教官の説得が一番面倒くさいなく。あのミッター君やアーダル君が

煙たがる時点でお察しだよ。」

「最悪私がシュターデン中将の食事に細工致します。中將がお眠りの間に事を済ませればよろしいかと。」

「わかった。ジークの言う通りにする。」

「皆集まってくれてありがとう。」

「司令官閣下、本日は意見具申の機会を下さりありがとうございます。」

「皆の懸念はわかってる。我々は三方から包囲されつつある。それに対する私の注意を喚起したいと。」

「左様です閣下。こちらを御覧下さい。」ホログラムディスプレイを起動する

「我ら結城機動艦隊2万に対し、中央にヴァルゴ型が指揮する敵艦隊12000、左に

キャンサー型率いる13000、右にスコープオン型率いる15000がそれぞれ布陣し我が艦隊に迫りつつあります。ここは不名誉なれど要らぬ犠牲を出さぬ為にも参謀長として撤退を具申致す次第でございます。」

「私達に撤退は許されないよシユターデン中将。陛下が受けた予言曰く今回の戦いは『退けば死。進めば完全なる勝利』らしいからね。それに陛下から御即位と誕生日プレゼントをせびられてるんだけど金欠で何も用意できない以上勝利を献上するしか私には選択肢がないの。陛下は普段は優しいけど一度怒らせると三ノ輪宰相代理ですら止められないのは中将も知ってるでしょ？それに私達の倍の戦力と言っても分散している上こつちの方が足が早いから、中央を正面から打ち破り左を後背から奇襲、右を側面から攻撃して各個撃破すれば済む話だよ。」

「危険です！机上の空論が過ぎますぞ！」

「でももう賽は投げられた。今撤退したら敵は安心して追撃してくるよ。せめて牽制の一戦位はしないとどつちにしてもまずいから、我が艦隊の先鋒はファーレンハイト少将が取つて。メルカツツ大將はファーレンハイト少将を航空支援で援護してあげて。他の皆は私直轄の艦隊と一緒に二人によってズタズタにされた敵艦隊に砲撃を浴びせる仕事をしてくれれば良いよ。じゃあ解散。戦闘に備え皆休んで英気を養つて。メルカツツ大將とファーレンハイト少将は後で私の部屋に来てね。」

結城友奈 上級大将 執務室

コンコン「キルヒアイス大佐入ります。メルカッツ大将、フアーレンハイト少将もお連れしました。」

「どうぞ。」

「失礼します。」

「お邪魔するぞ友奈。」

「またご馳走になりました。」

「うん。メルカッツ先輩もアーダル君もお疲れ様。はい東郷さん謹製ぼた餅とコーヒー。」

「ではありがたく頂戴しようかフアーレンハイト。」

「はいメルカツツ提督。キルヒアイスも。」

「ありがとうございますございますフアーレンハイト少将。」

「では……。」

「……いただきます。」

「ふむ……東郷大将も腕を上げたな。前よりも甘さがまろやかだ。憲兵総監をやりながらも料理にぬかりはないか。見事。」

「そうですね先輩。でもまあどうせなら出来立てが良いな。早く終わらせてオーデインに帰ろうジーク。」

「はい、友奈様。」

「そういえばアーダル君はまだ結婚しないの？もう良い年だと思うよ？」

「そうですね。ですが弟妹達が独り立ちするまでは所帯は持てません。馬鹿親父の不始末がまだ残っていますので。」

「アーダル君も勇者部の一員なんだから私の方から補助出すよ。勇者部6箇条その4・6を忘れた訳じゃないでしょ？」

「困ってはいましたが悩んでいた訳でも助けが必要だった訳でもありませんでしたから。」

「友奈の手前プライドがあるのはわかるがなフアーレンハイト、犬吠埼上級大将曰く『男のツンデレは需要無いからやめろ。』とな。それを面と向かって言われたレンネンカンブの落ち込みようは面白かったが・・・。」

「・・・そうすな。下手に肩肘張ったところで友奈にかかれば一分と経たずに崩れてしまふ。帰ったら支援をお願いします閣下。」

「うん。じゃあそろそろお開きにして仕事にかかろう。皆よろしくね。」

「「はっ！」「」 敬礼

「・・・」 敬礼

第4次アスターテ会戦（前編）

今作の結城友奈は本来の結城友奈と皇帝ラインハルトが7：3で混ざっており覇気に満ちています。原作の結城友奈より遥かにメンタルが強固であり、どっしり構えていられます。彼女の背中を幼馴染 兼 副官 ジークフリード・キルヒアイスが支えます。

「ファイエル撃て!!」

「反応が遅い。低能はどこにでもいるもんだねジーク。」

「はい。ですが友奈様が労せず、尚且つ無用な犠牲を出さずに元帥杖をお手にできるにこしたことはありません。ここは素直に喜んででもよろしいではありませんか。」

「エルラツハ中将与フォーゲル少将がサボらないと良いけど。」

「では念のため遠回しに警告の連絡を致しますか?」

「大丈夫。私の勇者適正値ならなんとかなるよ。それにサボったならサボったでブラウ

ンシユヴァイク公やリツテンハイム侯に文句付けて喧嘩を売れるし。

ウルリツヒ君の手帳もたまには使わないと亡くなったグリーンメルスハウゼン大将に怒られちゃう。

サボらなかつたらサボらなかつたで私の元帥杖が確実になるだけだから、ヴァルハラ
のグリーンメルスハウゼン大将も喜びこそすえ、怒ったりしないだろうしね。

カール君、ブリュンヒルトをもうちよつと前進させて。」

「御意。」

アースグリム 艦橋

「なるほど。『勇者』の加護を受けて戦うのは初めてだが……これは気分が良い。」

勇者とは皇帝から指名され、地の神々から人々を守護する力を与えられた若き女性達のこと（一人だけ例外あり）である。特に勇者の近くで戦っている帝国軍艦艇は各スベックがカタログスベック4割増になる。ファーレンハイト少将の艦隊3000は高速戦艦、巡航艦、駆逐艦のみで構成されており鋭さに特化した艦隊なのだ。当然突撃による破壊力は（バーテックスにとって）中々にエグいものになる。

「戦闘艇、発進せよ。近接戦闘に移るぞ。」

「はっ。ワルキューレ発進！」

「この戦い、長引けば挟撃されるのみならずエルラツハとフォーゲルにサボタージユの機会を与えかねん。友奈の為に早めに撃破せねば……。」

実はファーレンハイトは以前、父親の喘息が急激に悪化し病院入りしていたタイミングで運悪く僻地に一時的ながら中期出張を強いられてしまい、かといって幼い弟妹を保育施設に預ける金も無い。それを風の噂で聞き付けた友奈（当時はまだ中將だった）に下宿先で一時的に預かって貰った（勿論無償で）事があったのだ。その恩を返す一環として勇者部に入部し、今回の出兵に志願したのだ。

「間も無く制宙権を掌握できます。」

「よし。ザンデルス、メルカツ提督に打電。『下処理完了』とな。」

「はっ。」

「私自身の手柄の前に・・・とにかくは勝つ。それだけだ。」

ネルトリンゲン 艦橋

「フアーレンハイト少将より入電。『下処理完了。』」

「よし、我が艦隊も前進。雷撃艇を前に。」

「はっ。雷撃艇発進。」

メルカッツ大将の艦隊3000は宇宙空母かそれを護る標準型戦艦か、或いは巡航艦（少数）しかない。汎用性に乏しい編成だが、他の艦隊と連携するのが前提なので問題は無い。メルカッツ大将の十八番戦術、

おびただしい数の戦闘艇と雷撃艇による高価値目標への集中砲火

← 敵指揮系統の破壊 ←

艦載機を收容し長距離砲撃でローリスクでジワリジワリと削るに最適化された艦隊編成なのである。

「脆いな……。」

「ご不満ですか?」

「うむ……せつかく後輩（友奈）が上級大將入りと専用艦恩賜の口実の為に私を出兵司令官リストに入れてくれた以上、強大な敵と戦い、これを撃破しようと考えていたのがな……全く、この貧乏性が災いして出世できないことをわかっていても直せんのは愚かも良いところだ。」頭をかく

「ですがそんな閣下の人望を慕ってケンプ中將以下結城上級大將に次いで勇者部部員の中で最も擁する部下が多いのです。そこは誇ってもよろしいかと。それに小官は長らく閣下にお仕えしてきましたが、閣下に似合うのは戦場と軍教育機関の校長のみです。軍務省や統帥本部で暇をもて余すのは似合いません。」

「・・・ハツハツハ。卿も言うようになったな。ならば儂も自分に似合う仕事を果たすでしょうか。」

ブリュンヒルト 艦橋

「友奈様、最後の敵はスコープオン型が旗艦です。ファールレンハイト少将を後方予備に下げ、メルカツツ大将には艦載機で攪乱して貫きますが、高価値目標を撃破次第同様に

下がって貰いましょう。後は私が出ます。友奈様は総司令官としてどっしり構えておられますよう。」

「いやジーク。私も勇者だから、今回は出るよ。リュツケ君、私とジークの装甲服、クロスボウとトマホークを。」

「はっ。」

「私達は生きるも死ぬも一緒。幼年学校で約束したでしょ？」

「……では友奈様、せめて後衛で私を援護して下さい。前衛にはお出になられませんよう。」

「……わかった。じゃあ行こう。宇宙を手に入れる為に。」

「はい、友奈様！」

第4次アスターテ会戦（後編）

「大神オーデインよ、若葉大帝よ。ご照覧あれ！我らの戦いを！我らの路を明るく照らす友奈の戦いを！」

「閣下！」

「気持ちにはわかるが落ち着けシユナイダー少佐。我々にできることは無い。精々神樹様に祈る位だ。」

「はっ……お見苦しいところをお見せしました。」

「構わん。皆同じ気持ちだ。だが心配あるまい。友奈とキルヒアイスは強いからな……。」

口ではそんなことを言っているメルカツツではあるが、行動が言葉に比例していない。何故なら落ち着いた表情で優雅にコーヒーを飲んでいるからである。友奈とキルヒアイスが勝利することを微塵も疑っていないのである。

ジークフリード・キルヒアイス s i d e

「友奈様、とりあえず頭を抑えましょう。」

「うん。クロスボウで弾幕張るよジーク。」

「お願いします。」

はじめまして かな？ジークフリード・キルヒアイス（偽）だ。今友奈様と一緒にバーテックスと戦っている。前世では小さな島国の名も無き市役所の下っ端だった。退官して80位まで生き老衰で一度死んだんだ。そして気付いたらこの銀河英雄伝説の世界に生まれていた。自分がジークフリード・キルヒアイスになれたと気づき、僕は年甲斐もなく喜んだ。

前世では良き上司に恵まれなかった。でも今世ならアンスバッハの凶行さえ凌げばあの皇帝ラインハルトの副帝になれる。

良き上司へ最高の親友に会える運命に静かに狂喜していたんだ。だが歴史を学ぶにつれてこの世界が本来の『銀河英雄伝説』と違う世界だと気付かざるを得なかった。

バーテックス？

銀河帝国 初代皇帝 乃木若葉？

帝国暦140年？

おかしい。何故この伝説のスペースオペラにゆゆゆ要素が混ざっている？

ゆゆゆを否定するつもりは無いが、正直ゆゆゆでは銀河英雄伝説に到底及ばない。銀河英雄伝説はアニメでは無い！日本文化史上最高のスペースオペラだ！何故混ざって

しまったんだ!!

嘆いてもしようがない。ひとまずラインハルト様とアンネローゼ様が隣に越してきたら仲良くなつていこうじゃないか。

「母さん。」

「どうしたのジークフリード?」

「隣に誰か引越してきたの?」

「とても栄誉なことに結城伯爵家の方々が越してこられたみたいよ。粗相の無いようにね。」

「はい 母さん。」

結城伯爵家? 結城……まさか そんなことが。試しに外に出てみると……

「おゝ綺麗なお花畑。ありがとうございませすお母様!……君は?」

「は はじめまして。僕はこの家のジークフリード・キルヒアイス。」

「ジークフリード?……どこにでもいそうな名前だね。私は結城友奈!よろしくね!」
手を出す

「う　うん。　よろしく。」握手

思えば、これが僕の第二の人生の始まりだった。

「ハアーツ！」　一刀両断

御霊が見えた！

「友奈様！」

「うん！」クロスボウを捨てる

「吹っ飛ばえー!!」勇者パンチ

「「ウオーーッ!」」

「「帝国万歳!! 結城閣下万歳!!」」

「シユナイダー少佐。信じられるか？後輩（友奈）は階級こそ私より上だが、まだうら若き少女、キルヒアイスもそうだが未だ14歳だ。

今の銀河帝国は歴代「勇者」の屍の上に立っている。

彼女達の犠牲は帝国の民250億を150年生き長らえさせてきた。

私は皇帝陛下を含め先代「勇者」の方々とも交流があったからよく知っている。

誰もが表面上元気を取り繕っているが、心はボロボロだ。責任に押し潰されそうになりながらな。

「このような不毛な連鎖はそろそろ断ち切らねばならん。皇帝陛下と宇宙艦隊司令長官、宰相代理が手を組んでその為の計画を建てているらしいが、それが始まるまでは我々が友奈を支えてやらねばならん。」

「はっ。」

「まあ尤も、友奈は別だ。キルヒアイスに半ば依存している事、先代勇者だった母君の仇である奴らへの強い復讐心が友奈の心を補強している。並みの勇者など比較にならない程友奈は強い。だが強さだけでは駄目だ。あの強さは脆さを抱えている類い。遠からぬうちに砕けるだろう……。」

約2年後、メルカッツの懸念は現実となる。ある悲劇を引き金として・・・

英雄と 友と 部員達と

惑星オーデイン 帝国軍地上ドック

「閣下、接舷致しました。」

「ありがとうございます。じゃあ行こうかジーク。」

「はい、友奈様。」

新無憂宮 黒真珠の間

「これより、結城友奈元帥の叙任式を執り行います。全人類の支配者にして、全宇宙の統治者。天界を統べる秩序と法則の保護者。神聖にして不可侵なる銀河皇帝。園子陛下

の御入来！」

「……。」玉座に座る

「結城友奈 伯殿！」

「……。」跪く

「アスターテ星域におけるパーテックス討伐の功績により、汝結城伯友奈を帝国元帥に任ず。また帝国宇宙艦隊副司令長官に任じ、宇宙艦隊の半数を汝の指揮下に置くものとす。帝国暦151年 銀河帝国皇帝 乃木園子。」元帥杖を下賜する

「……14歳の元帥か。確かにあの娘はそれなりの功績はあげているが、歳が幾分若すぎる。宇宙艦隊の半数を任せられるほどの能力がまだあるとは思えません。閣下はいかががお考えですか？」

「……確かに卿の言う通り若いのは事実であるし、さらに加えるのであれば彼女は復讐心と副官に対する依存によってその精神が安定していると言つてよく、私などからすればまだまだ若いと言わざるを得まい。だが私と宰相代理の思惑と陛下の御意が重なつてしまった以上あの者にもそれなりの地位を今のうちに得てもらわねば困るの

だ。」

「・・・なるほど。あの娘にゴミ掃除をさせるというわけですか。」

「神樹様も面倒な者に力を与えたもうたものだ。あれを後任に据えねばならぬ私の心
も考えてくれ、オフレックス。」

「・・・心中お察しします。」

結城元帥府の創設に伴い、軍務省勇者部は結城元帥府の指揮下に移されることとなった。宇宙艦隊の半数と、現職の勇者達への指揮権が友奈に与えられる形になったのである。

「皆、準備できた？」

「はい。」

「じゃあ『勇者の谷』に報告に行くよ。」

結城元帥府の特徴として、大会議室の机は円卓であるという特徴がある。正式な式典以外では、結城元帥府のメンバーは皆対等でありたいという友奈の意思の現れであった。

「皆、私のお母様の墓に花を置いてくれてありがとう。これで正式に私の元帥府が始まった訳だけれども……さてまずどうしようか？」

「では閣下、ひとまず創設記念パーティー、その最初に犬吠埼総監に女子力、淑女の嗜みの一つということで一発芸をやっていたかどうかではありませんか（笑）！」

「女子力とは（哲学）。」

「なんで私にふったんだビツテンフェルト!？」

「いきなり余計なことを言い出すなビツテンフェルト。ロイエンタール、卿からも言うてやれ。」

「犬吠埼上級大将におかれましては、是非とも女子力（笑）をお見せいただきたい。オフレッサー上級大将を素で破った女子力（笑）とやらを。」

「おーいロイエンタール！女子力のうしろに（笑）がついてるぞ！馬鹿にすんな！」

「犬吠埼上級大将はどうやら女子力を戦闘力と勘違いしておられるらしい。」

「メックリンガー、犬吠埼総監に女子力を教育してやれ。」

「そうはおつしやるがメルカツツ上級大将、私は男ですが？」

「芸術とピアノを教えてやれば、少しはお淑やかになるだろうからな。帝国騎士ヘライヒスリッター」出身（＝名ばかりの貴族）とはいえ帝国が誇る装甲擲弾兵総監がこれでは故郷の総監の母君もさぞや嘆くだろうからな。」

「ひたすらカオスになりましたね友奈様。」

「まあ元気が無いよりかはずっと良いよジーク。ジークも昇進おめでとう。少将の制服、様になってるよ。」

「ありがとうございます。これも友奈様のご助力あつてのものです。」

僕はオリジナルのキルヒアイス程有能ではないから。

「でねジーク、前 財務尚書カストロプ公の件は頭に入ってる？」

「地位を傘にきて不正蓄財をしていたとか。その額およそ100億帝国マルク。前財務尚書の事故死後にこの件が内部告発（大嘘）で露見、息子のマクシミリアンに返還を要求するも拒否、叛乱を起こしたと。」

「そう。シユムーデ少将とブラウンシユヴァイク公系・リツテンハイム侯系若手が討伐に出たけど多分負けるから、明後日付であげる艦隊と工作艦を率いて叛乱を鎮圧して。」

勅命が出るから勝てば箔がつく。堂々と中将にできるからね。頑張つてジーク。」

「御意。」

カストロプロ動乱

新無憂宮 庭園

「陛下、本日はお招きくださりありがとうございます。」

「キルヒアイス少将、今ここには私と君しかいないよ?」

「はつ。では園子様、本日は何用で私をお呼びに?」

「ゆくゆが前から言つてた計画の詳細を話す時が来たんだよ、キルヒアイス少将。」

「私にも教えて下さると?」

「うん。大体できたからね。私は初代様以下歴代の皆様と違って、皇帝の器じゃない。人類の歴史が始まってからずっと乃木王朝があつた訳じゃないし、永続した国家は有史以来無かつた。どうせ滅びるなら、民に害無く、より良き者に引き継がせるべきなんよ。」

「園子様におかれる『より良き者』とは?」

「キルヒアイス少将の主人かな。他にいないよ。」

「・・・。」

「初代様以降、乃木王朝は人心安定の為とはいえ嘘をつきすぎた。そろそろリセットし

て綺麗にしないと取り返しがつかない事態を招きかねない。まあゆくゆくに禅譲するかどうかは掃除してからの情勢によるかな。でもひとまずブラウンシュヴアイク公やリッテンハイム侯の処分が終わらないと始まらないから、頑張ってきてほしいの〜キルヒアイス少将。」

「わかりました。全ては友奈様と園子様御為に。」

カストロブ討伐艦隊 旗艦『タンホイザー』休憩室

「なんだここにいたのかベルゲングリユーン。」

「・・・。」

「飲み過ぎだぞ。勤務時間だつてのに何やってんだ？」酒瓶を片付ける

「結城伯は名将だ。勇者としての力は元より艦隊指揮もできる。戦争の天才と言って良い。だが、その副官も有能とは限らん。付録は所詮付録さ！」

「言い過ぎだぞベルゲングリユーン。酔ってるな？」

「ああ酔っているとも。素面でやっていられるか！前回失敗した時より兵力が少ないんだぞ。」

「だからこそ、酒など飲んでる場合ではなからう。」

「ええいほつといてくれ！」

「ベルゲングリユーン大佐、ビューロー大佐。」

「ー」敬礼

「・・・。」答礼

「艦隊編成の確認をします。艦橋にいらしてください。」

「はっ。」

「ベルゲングリユーン大佐、卿の懸念は尤もです。確かに私の今までのキャリアは、元帥閣下の付録でした。今回の叛乱鎮定は私が元帥閣下の付録から副将に上がる為の戦い

です。信頼できないのはわかりますが、信じていただきたい……などとは言いません。見ていていただきたい。一兵たりとも戦死させずに鎮圧して見せましょう。」

「カストロプ本星の防空システムは強力ですが、あくまで静止衛星です。我々が射程に入らない限り攻撃できません。カストロプは私兵の艦隊を持っていませんから、宇宙権の憂い無く工作艦を展開できます。指向性ゼツフル粒子をシステムに纏わせ、本艦主砲

で起爆、破壊します。」

「なるほど。誰でも思い付く手ではあるでしょうが、ここまで大規模にやった奴は歴史上いますまい。さぞや汚い花火が見れるでしょうな。」

「元帥閣下と違い花が無いのは認めます。ですが戦死者が出ないのですから、それで勘弁していただけますかベルゲングリユーン大佐?」

「・・・小官は戦死せずに、退屈せん程度に戦えれば結構です。本当に閣下がそんな上官かどうかは、今後の戦いで見極めさせていただきますよ。」酒をゴミ箱に捨てる

「大佐、どちらへ?」

「酒を抜く為に、タンクベッドで一眠りしてきます。すまんがビューロー、しばらく頼む。」

「わかった。やっと勤労の天使が降りてきたなベルゲングリユーン。」

「ふん。」

「閣下、指向性ゼツフル粒子の展開、完了しました。」

「ありがとうございます。主砲、準備はできてますか？」

「いつでも撃てます閣下！」

「主砲、発射！」

「動乱を収めた!? たった10日で!」

「いや。移動に6日、事後処理に2日かけたらしい。実質2日だな。戦死者0。見事だ。」

「どうやら元帥閣下のただの副官ではなかったようだな。」

結城元帥府 元帥執務室

「中将昇進おめでとうジーク。」

「申し訳ありません。」

「何で謝ってるのよ?」

「三好中将、血は流れました。首謀者を死なせてしまいました。申し訳ありません友奈様。」

「・・・乃木王朝の闇がカストロプを死なせたただだよ。ジークは何も悪くない。」

「はっ。ありがとうございます。」

コンコンコン

「閣下、オーベルシユタインです。」

「入って良いよ。」

「失礼します。閣下、ご報告致します。ブラウンシユヴァイク公とリツテンハイム侯以下およそ3600名の貴族がリップシユタットの森で“園遊会”を開催し、現在共同宣言に全員が署名をしているとのことです。」

「・・・直ぐに動いた方が良い?」

「いいえ。今後の人心掌握を考えた場合、奴らが各々の領地に逃げる直前に大部分を捕らえるか船ごと処分し、逃げた少数は恐らくガイエスブルク要塞に逃げる筈です。そこを堂々と決戦し、勝利すれば、閣下の地位と名誉は今よりも不動のものとなるでしょう。」

「連中が逃げるスケジュールを確認なさい。民間船を盾に逃げられてはたまったもんじゃないわ。航路局の仲間に通達する。」

「かしこまりました三好中将。では失礼します。」

「・・・始まりますね。友奈様。」

「粗大ゴミは纏めて処分する。門閥貴族は最早害でしかない。私達が宇宙を手に入れる障害は、誰であれ排除する。」

「お供します、友奈様。」

Ⅱ 星乱の章

悲劇の幕が上がる・・・

帝国暦152年 8月 結城元帥府 元帥執務室

コンコンコン

「入って良いよ。」

「閣下、執務中失礼します。二等書記官テオドール・フォン・リュツケ中尉であります。マリーンドルフ伯爵家のヒルデガルド氏が参られました。お通ししても？」

「良いよ。」

「かしこまりました。」

「キルヒアイスがないのが残念でなりませんマリーンドルフさん。ご存知の通りあれ

とマリーンドルフ家は些かご縁がありますから。」

「はい。その節はありがとうございます。父の無事もキルヒアイス提督の手腕あつてのものでしたから。」

「で、お話とは?」

「はい。間も無く始まる閣下と門閥貴族達の抗争に際し、マリーンドルフ家以下一族郎党全員閣下にお味方致したく参上しました。こちらはその旨の誓約書です。確認の上、受理していただけると幸いです。」

「・・・私達を高く買っておいでのように。」

「これから新しい時代が始まるとわかつている者として流れに乗る。生き残るとはそういうことです。それに乃木王朝は150年続いています。不死の人間も国家も星も無い以上、乃木王朝だけが例外足り得る筈がありません。」

「・・・大胆な人だ。ますますキルヒアイスと会わせてみたいね。」

トントンントン

「誰?」

「オーベルシュタインです閣下。」

「入って。」

ガチャン「失礼します閣下。例の報告が入りました。大会議室にお越し下さい。」

「うん。ではマリーンドルフさん、とても有意義な時間でした。またお越し下さい。キルヒアイスの手打ちうどんを^ご馳走しましょう。」

「ありがとうございます閣下。^ご武運をお祈りしております。」

元帥号を与えられ1年が経ち、結城友奈はミュッケンベルガーから宇宙艦隊司令長官

職を引き継ぎ、それに伴いジークフリード・キルヒアイス中将を一気に上級大将に昇進させ、宇宙艦隊副司令長官に任命した。ミッターマイヤーとロイエンタールは大将に昇進し友奈、キルヒアイスに続く結城元帥府N0.3となった。それに伴いイゼルローン要塞駐留艦隊司令官ゼークト大将、要塞防御指揮官シュトックハウゼン大将を更迭し後任にメルカツ上級大将、三好中將を任命した。フェザーン駐留艦隊司令官アーベントロート中將も更迭、後任に犬吠埼風上級大将、フェザーン基地司令職に犬吠埼樹中將を任命、門閥貴族と抗争している隙をバーテックスに突かれぬよう万全の態勢を整えていた。

「最終的に確定した情報からお伝え致します。門閥貴族共は『討奸（まだ若い皇帝に代わり権限を握る三ノ輪宰相代理と結城伯 宇宙艦隊司令長官の専横に反対し、奸臣を討つ）』を名目に盟約を結びました。このリップシュタット盟約に参加した貴族は、3621名。盟主にブラウンシュヴァイク公オットー、副盟主にリッテンハイム侯ウィルヘルム。軍の総司令官はフェードア・フォン・シュターデン大将。尚、奴らは怪しまれない程度の規模で少数ずつ各々の領地へ帰還し始めております。そろそろ動くべきかと。」

「シユターデンか。俺達の学生時代の恨みを晴らす機会が来たなロイエンタール。」

「ああ。どの科目でも俺達はB以上を絶対取っていた中で奴の戦術理論だけは『戦理に合わぬ』とD評価だったからな。」

「まずはブラウンシユヴァイク公ら本隊と対峙する部隊編成からだけど、ミッター君、オスカー君、フリッツ君、ケンプ君で第一艦隊群を編成。後詰め 兼 賊討伐軍司令部としてカール君、ミュラー君、ウルリツヒ君、エルンスト君、それと私で第二艦隊群を編成。更にジークを総司令官として辺境星域平定の為の第三艦隊群を編成、ワーレン君、ルツツ君、レンネンカンブ先輩はジークに協力して門閥貴族の資金源を断つて。アーダール君とメック君はオーデインに後方予備として残り賊軍の別働隊など緊急事態に備えて。芽吹ちゃん以下今オーデインにいる勇者は陛下と宰相府の警備をお願い。何か質問は？」

「……………」

「じゃあ作戦開始！」

結城元帥府 元帥執務室

「確かシユトライト准将だったね。情報によれば私を暗殺しようブラウンシユヴァイク公に勧めたと聞いてるけど、本当？」

「事実です。」

「素直だね・・・何故そのようなことを？」

「あなたを放置しておけば、このようなことになるのは明白だったからです。我が主君に決断力さえあれば・・・ブラウンシユバイク公爵家のみならず乃木王朝全体にとつても真に惜しむべきことでありました。」

「手錠を外してあげて。」

「!？」

「殺すには惜しい人だ。通行許可証を出すから、主人の元に戻りその忠誠を全うして見

せて。」

「・・・いいえ閣下。もしお許しただけなのでしたら、オーデインに留まることをお許しただけませんか？」

「主人の元には戻らないの？」

「もし戻っても、内通を疑われ処罰されます。ブラウンシユヴァイク公は部下の忠誠心というものをあまり信じないお方なので。」

「わかった。じゃあ私の部下にならない？ 副官がいなくて困ってるんだ！ 待遇は応相談だよ？」

「ありがたいことですが、今日までの主人を明日から敵に回す気にはなれません。お許し下さい。」

「わかった。自由にして良いよ。」

「ブラウンシュヴァイク公の元部下、フェルナー大佐であります。」

「元？」

「はっ。今日を境に見限りました。付きましては閣下の元で働かせていただきたく参じました。」

「すると君の忠誠心はどういう基準で左右されるのかな？」

「忠誠心などというものは、その価値を分かる人に捧げてこそ意味のあるもので、人を見る目のない主君に忠誠を尽くすなど、宝石を泥の中に放り込むようなものです。社会にとつての損失だと思いいなりませんか？」

「ぬけぬけと言うもんだね。オーベルシュタイン。」

「はっ。」

「使つてあげて。彼のようなタイプは私よりオーベルシュタインが使つた方が上手いくと思う。」

「御意。」

皇帝からの勅命を受け結城伯 友奈は宇宙艦隊司令長官、統帥本部総長、軍務尚書の
帝国軍三長官職を全て兼任し 30年ぶりに帝国軍最高司令官の職を叙されリッ
シュタット貴族連合軍討伐の勅命も重ね与えられた。

「行こうジーク！一緒に宇宙を手に入れるんだ！」手を出す

「はい！」武運を、友奈様！」握手

人類史上最大かつ銀河帝国史上最大の内乱が幕を開けた。それは結城友奈の覇道の本格的な始まりでもあったが、同時に・・・とある悲劇の始まりであった。

師弟対決

「・・・こんな・・・こんなふざけた法案を本当に施行する気かひなた！私に大量虐殺を命じろと！正気か!!」

「若葉ちゃん私だつて不本意なんです！それにこれは議会事案なのです。逆らえませぬ！」

「・・・よかろう。帝国の予算不足の現実もある。私は地獄に落ちるな。」

「その時は私も御供します。若葉ちゃんだけに背負わせたりはしません。」

「・・・ありがとうひなた。私が頼れるのはお前だけだ。」

シユターデン艦隊 旗艦『オルテンブルク』

「シユターデン卿、もう3日も待ちぼうけですぞ！そろそろ一戦しませんと敵味方の士気に影響が出かねません！」

「・・・よかろう。『神速』と称えられるミッターマイヤーの動きの鈍さは妙だが致し方無い。では敵を迎撃する。まず艦隊を二手に分け機雷原を迂回する。左翼部隊は私が率いる。右翼の部隊をヒルデスハイム伯、卿に任せる。」

「承知した。」艦橋を出ていく

「うっ・・・くう。」胃があるあたりを押さえる

「閣下、ご無理をなさいませんよう。」

「わかっておる・・・。」

「ミッター君、先陣は任せて良いかな？ 敵は総司令官のシュターデン教官が直々に出て
るし、オスカー君と協力して初戦に勝利して士気を上げて。」

「御意。」

「さてロイエンタール。とりあえず俺がシュターデンを討つ。卿はレンテンベルグの近
くで伏兵としてケンプ・ピッテンフェルトと共に俺が万が一取り逃がしたら捕まえる役

を頼む。俺が取り逃がさずに勝利できたらそのまま合流しレンテンベルグ要塞を攻略する。それで良いか？」

「第一艦隊群の司令官は卿だ。俺達は従うだけだし、その作戦で大丈夫だろうさ。」

「右に同じく。」

「結城侯も俺が派手にやるのをお望みだからな。期待には精々応えるところか。ではな。」通信を切る

「閣下、敵が動き出しましたぞ。」

「来たか。ドロイゼン、先陣を任せる。結城侯のご期待に相應しい活躍を期待しているぞ。」

「はっ！」

「F e u e r (ファイエル)！」

「全く貴族のバカ息子共は度し難いな。我ら平民がいつまでたつても踏まれ殴られていく立場であるものか！」

「攻撃の手を緩めるな！敵に反撃の機会を与えるな！一挙に揉み潰せ！」

「よしこのまま全速で機雷原を迂回、残る別働隊の背後を襲う！」

「背後より敵！」

「背後!? そんな馬鹿な! 敵は前方の筈だ！」

「敵の本隊でしようか？」

「いや早すぎる! ヒルデスハイムの部隊とは連絡は取れんのか?」

「妨害が激しすぎて無理です！」

「くう・・・。」

「いけません! 来ます！」

「閣下、反転して後背への備えを！」

「・・・ぐはっ」吐血

「閣下！」

「否、駄目だ! 撤退を！」

「敵は逃げにかかりました。」

「深追いの必要は無い。ロイエンタールが捕まえてくれる。」

ミッターマイヤーの言葉通り這々の体で撤退したシュターデンは案の定ロイエンタール艦隊に捕まってしまいその件を含めてレンテンベルク要塞に話して降伏を勧告しレンテンベルク要塞はあっさりと降伏した。これにより結城侯 友奈率いる枢軸軍はガイエスブルグ要塞攻略の拠点を意外とあっさり手に入れたのである。

キフオイザー星域から愛を込めて

キフオイザー星域

「何事でしょうか司令官？」 敬礼

「はい。リッテンハイム侯の様子が情報部から送られてきました。それに伴い結城侯より新たなご下命がありました。ジンツァー准将。」 敬礼

「敵の副盟主リッテンハイム侯がブラウンシュバイク公との確執のあげく、5万隻の艦隊を率いてこちらに向かっているとの情報が入りました。それに伴い元帥閣下よりこれと戦い撃破せよとのことです。」

「いよいよですか。」

「お三方には当初は最低限の反撃に留めていただき、まず敵の注意を引いてください。その隙に私が本隊として800隻を率い横から攻撃を加えます。」

「え？」

「たった800隻？」

「それとルッツ提督には一つお願いがあります。」

「何でしょう?」

「敵艦隊とガルミツシユ要塞の間の航路上にリッテンハイム侯は長期戦に備え補給艦隊を配置しているはずです。この補給艦隊とリッテンハイム侯の本体の間に200隻ほど配置しおそらく部下を置き去りにして単艦で敗走するであろうリッテンハイム侯を捕らえてください。最悪撃沈してしまっても構いませんが、生かして捕らえたほうが後々のガルミツシユ要塞攻略の役に立つと思います。要塞の最高指揮官でもあろうリッテンハイム侯をこちらが捕らえたということを示すことができれば、攻略も容易にできるでしょう。」

「了解しました。」

リッテンハイム侯専用艦 オストマルク

「敵影発見。数およそ4万。」

「やってきよったか。どうせ小童と戦うのであればピンク髪の方の子娘を相手にしたかった。赤毛の子分の方では不足だがこの際仕方あるまい。」

「敵艦隊斜線陣をとっております。いかが対処なされますか？」

「小賢しい真似を・・・数で圧倒する。小細工は不要だ。射て！」

戦艦 スキールニル

「ふん。遠いわ。間合いもわからんか。もう少しひきつけろ。600万キロまで迫ったら攻撃開始だ。」

「・・・600万キロです。」

「よし撃てー！」

戦艦 バルバロッサ

「始まりました。」

「本隊を発進させる。」

「敵の左翼は高々2万。何故一気に打ち崩せんのか!？」

「恐れながら我が艦隊5万隻と申しましても、その編成も構成比率も通常のものとは異なりまして『烏合の衆だと申すか!』いえ。しかし数程の働きをするには……。」

「左舷方向、新たな敵を確認。数1000隻未満。」

「何を狼狽える！敵は少数ではないか！」

「よし、敵が崩れたぞ！攻撃開始！」

「5分後にワルキューレを発進、制宙権を確保しろ。」

「（敵の艦隊編成の不備を看破してのことか．．見事！）敵の混乱に乗じて一気に殲滅する。全艦、突撃！」

「戦艦ゴスラール撃沈、戦艦ドルトムント大破！」

「あ あれは!？」

「うつ・・・！」

「あれがリツテンハイム侯の旗艦だ！逃がすな！戦乱の元凶を捕らえよ！ワルキューレ
発進、推進部を攻撃し敵の足を止めよ！」

戦艦バルバロッサ キルヒアイスの執務室 テレビ電話

「友奈様。」敬礼

「ジークお疲れ。リッテンハイム侯は捕らえたの？」答礼

「はい。このままガルミツシュ要塞に降伏を勧告します。拘束したリッテンハイム侯を見せればあっさり降伏して貰える筈です。」

「うん。ガルミツシュはレンネンカンフ先輩に任せてジークとルッツ君とワーレン君は私達本隊に合流して。一緒にガイエスブルクを陥とすよ。」

「御意。友奈様、ご武運を。」

ガイエスブルク要塞

初戦でいきなり総司令官であるシユターデン大将を失った貴族連合軍は、代わりにフォーゲル大将を充てて結城侯 友奈率いる討伐軍に対抗しようとしていた。そこに結城侯 友奈からメッセージが届く。

「蒙昧にして臆病なる貴族達。実力を伴わぬ自尊心など捨てて降伏した方が良いよ。命を助けてあげるばかりか、無能な君達が生きていくのに困らぬ程度の財産も残してあげる。先日リッテンハイム侯はその卑劣な人柄に相応しく惨めな最後を遂げたよ。同じ運命を辿りたくなければ、無い知恵を絞って考えなさい。」

「おのれ小娘、よくも言いたいことを・・・。」

「あの小娘を引つ捕らえた者には、恩賞は思いのままだぞ！」

「「「オオーツ！」」」

「閣下、敵が接近して参りました。」

「何?」

「要塞主砲の有効射程ギリギリのところ、しきりに示威行動を取っております。」

「これ見よがしに!」

「あれはシユターデン大將が敗れた『疾風ウォルフ』の艦隊です。」

「平民共が・・・調子に乗りおって!」

「フォーゲル司令官、出撃命令を!」

「良からう。今度こそ門閥貴族の力を帝国中に知らしめるのだ! 盟主殿、一言宜しくお願ひする。」

「わかった。我々は勝利する。銀河帝国、万歳!!」

「『銀河帝国万歳!!』」

こうしてブラウンシユヴァイク公率いる貴族連合軍は結城侯 友奈に決戦を挑むためガイエスブルク要塞を後にした。艦艇数10万隻の堂々たる艦隊である。人類史上最大の宇宙艦隊戦である後にガイエスブルク会戦と呼ばれた10万対10万の戦い。人類の未来を賭けた戦いが、幕を開ける。

勝利、そして悲劇

「いや〜・・・若葉も歌野も棗も・・・先に・・・タマも年貢の納め時か・・・かはっ

吐血

「タマつち先輩、もう少し持ち堪えて！軍医が来るから！」

「杏・・・要らねえよ・・・あんま取り乱すな元帥・・・栄えある帝国軍統帥本部総長だろ？」

「でも・・・タマつち先輩！」

「ありがとう杏。後は任せたぞ・・・。」

帝国暦21年 6/29 0135 土井球子 上級大将 第三次イゼル

ローン要塞攻防戦にて戦死

享年 39歳

戦艦 ベイオウルフ 艦橋

「貴族の馬鹿息子共が。穴の中に引っ込んでいれば長生きできたものを、わざわざ宇宙

の塵になりに来たか。」

「閣下、ブラウンシュヴァイク公の旗艦“ベルリン”を確認しました！」

「ほう、お出ましか。我々の敗走が擬態だと気付かなかったようだな。ブラウンシュヴァイク公も出たとすると、精々派手に負けてやらねばならんな。」

「はっ！」

戦艦　ベルリン　艦橋

「敵は怯んでおるぞ！総攻撃だ！」

戦艦　ヴァイルヘルミナ　艦橋

「見ろあの醜態を！一度逃げ癖がつくと恥を恥とも思わなくなるのだ！一挙に奴を葬

り、ピンクの小娘も捕らえて、ギロチンにかけてやるわ！」

ブリュンヒルト 艦橋

「ミッター君の芝居も絶妙だね。」

「そろそろですか？」

「そうだね。全軍に通達、攻撃に転ずる。一隻たりともガイエスブルクに返すなど！」

「待ちかねたぞ！全艦全速！総反撃だ！」

ミッターマイヤー大將率いる第一艦隊群に突撃をかけた貴族連合軍であるが、まんまと誘い込まれた形になった。左から結城侯友奈率いる本隊第二艦隊群、右からジークフリード・キルヒアイス上級大將指揮する第三艦隊群が総攻撃を仕掛けてきたのである。

「敵の7割方は撃破するなり捕らえるなりしましたが肝心のブラウンシュヴァイク公は未だに捕らえるあるいは撃沈することはできておりません。どうやら公爵自身そこまですぐに出てはいなかったようです。」

「どうせ後ろで偉そうに構えていたんでしょ。奴自身の尊大さが身を助けるか。」

このガイエスブルク会戦において貴族連合軍は総兵力の8割を失ってしまった。しかし貴族たちの交戦意思は未だに砕けたわけではなく、以後の長期戦に備え未だに支配下にあった植民惑星から各種物資を徴用していた。しかしこのリップシユタツト戦役に伴う混乱の中で植民星の住民たちも貴族支配のタガが緩んできたことを敏感に感じ取っていた。それに伴いシャイド男爵が支配する惑星ヴェスターラントにおいて大規模な暴動が勃発。シャイド男爵はそれに弾圧を加えたがむしろ反乱の火は大きくなるばかりでシャイド男爵は反乱を鎮圧するどころか民衆によつて殺された。その報告をアン斯巴ツハ准将から受けたブラウンシユヴァイク公は当然激怒した。

「賤民共が、よくも我が甥を殺してくれたな！我が領土に生きる恩を忘れよつて！ヴェスターラントに核攻撃を加える。よもや一人も生かしておくな！」

「お考え直し下さい。」

「黙れ！下賤の者共を一人も生かしておくな！」

「閣下、惑星ヴェスターラントで民衆が蜂起、シャイド男爵が殺されました。潜入させた者からの報告によりますとこれに激怒したブラウンシユヴァイク公が72時間後、懲罰

の為に熱核兵器でヴェスターラントを爆撃することです。」

「本当？なら最寄りのジークの艦隊群に命じて攻撃を阻止しないと『お待ちください閣下。』？」

「いつそ血迷ったブラウンシュヴァイクに、この攻撃をやらせるべきです。貴族共の非人道性の良き宣伝材料になります。」

「オーベルシュタインはヴェスターラントの住民を宣伝の為に見殺しにしろと私に言うつもり？」

「帝国250億の民の為にです閣下。」

「・・・ジークに一個分艦隊で良いからヴェスターラントに向かわせるよう指令を『閣下！』考えさせて。ひとまず下がって良いよ。」

「・・・。」一礼し退室する

「ジーク。」

「友奈様、ヴェスターラントの件で参謀長からご不快な提案でもありましたか？」

「・・・流石だね。やっぱりジークに隠し立てはできないよ。」苦笑い

「友奈様、政略にはあまり口出ししたくはありませんが一言だけ申し上げます。政略の為に民衆の犠牲を厭わないというのではあの乃木若葉と変わるところが無いではありませんか！友奈様は友奈様の覇道をお進み下さい。何者にも邪魔されるべきではありません。私とて例外では無いのです。」

「……。」黙り込む

「参謀長は少なくない貢献を友奈様にしてきました。ですが彼は憎い乃木王朝を潰す為に友奈様を利用していただけです。忠誠心などある筈も無い。信念を曲げてまで言うことを聞く必要はありません。友奈様を彼が利用しているように友奈様も彼を利用するだけに留めるべきです。」

「……わかった。ごめんねジーク。こんな当たり前なことを言わせちゃって。」

「いえ。私は友奈様に半身と認めていただいている身。必要なら何でも何度でもお諫め致します。」

「今回の戦いが終わったら、またクロイツナハIIIでお休みを取るよ。今度こそ一緒に穏やかに過ごそうジーク。」

「御意。」

「フェルナー大佐、惑星ヴェスターラントに強行偵察艦を急いで派遣せよ。内密に、そして12時間以内に。」

「はっ。12時間ですな。」

「閣下、こちらをご覧ください。」核攻撃後のヴェスターラントの映像を見せる

「!?これは・・・どうということ!!」

「敵の攻撃が早まったようです。残念ながら派遣した艦隊は間に合いませんでした。」

「じゃあこの映像は何!?!」

「念のため先行させておきました強行偵察艦からのものです。」

「オーベルシュタイン・・・!」

「この映像を帝国全土に流すのです。貴族共と我々のどちらに正義があるか、子供でも

理解できるでしょう。貴族共は自分で自分の首を絞めたのです。」

「オーベルシュタイン、まさかわざと私に嘘の攻撃日時を……!」

「起こってしまったことは最大限利用すべきです。ヴェスターラントの住民250万の死を無駄にしないためにも。」

「閣下、報告致します! 惑星ヴェスターラントがブラウンシュヴァイク公の核攻撃を受け壊滅しました!」

「なんですって!?! どういうことですかベルゲングリューン准将?! 攻撃開始時刻は60時間後の筈では?!」

「はい! どうやら総参謀長が嘘の情報を流したようです。あの野郎ヴェスターラントの虐殺を宣伝に使うつもりです!」

「元帥閣下に直接確認してきます。艦隊のことをお願いします。」
「はっ。」敬礼

惑星ヴェスターラントの虐殺は帝国全土に大きな波紋を呼んだ。ブラウンシュヴァイク公の残虐さがクローズアップされるにつれ、相対的に結城侯友奈に対する臣民からの期待感が高まっていくばかりであった。帝国軍の若き英雄は帝国全臣民の希望となりつつあった。しかしそんな外部での盛り上がりとは別に帝国軍内部においては別の意味で波紋が立つ噂が立ちつつあった。

『ジークフリード・キルヒアイス上級大将と結城侯友奈が大喧嘩した』
というのである。

「友奈様、何故このようなことを?!」

友奈は目の前にいる直談判してきた親友に本当の事を言いたかった。オーベルシュラインが嘘をついたばかりにこのようなことを招いてしまったと。しかしヴェスターラントの住民を政治利用しようという下心が自分にあつたことは否定できない。白い手をした覇者など存在しないということと彼女自身よく知っていた。ヴェスターラントの住民達に対する贖罪の意味も込めてキルヒアイスには本当のことを話すにしても言い訳すべきではないと考えていたのである。

「まさかオーベルシュラインが嘘の報告をするとは思わなかったの!私だってこんなことしたくなかった!」

「……」

「でもごめん。ジークに嘘はつけない。私も心の片隅でヴェスターラントをブラウンシュヴァイクに攻撃させてそれを政治利用しようという下心がなかったわけじゃない。心のどこかにはあつたの。その結果がこれ……私はどうすればいいの?」

「友奈様、とりあえず私は下がります。私も友奈様も少し高ぶってしまったているようです。一旦お互いに頭を冷やすべきです。」

「うん。」

「では失礼します。」

終幕、さらば友よ

戦艦バルバロッサ キルヒアイスの執務室

結城侯友奈と喧嘩したキルヒアイスは、ルッツ・ワーレン以下ガルミツシュにいるレンネンキャンプ（と彼直属の部下）以外の第三艦隊群幹部を集め現在会議（という名の相談会）を開いていた。

「なんですと!?!つまり元帥閣下はヴェスターラントを見殺しにすることも選択肢に入っていたとおっしゃるのですか!」

「はい、どうやらオーバーシュタイン総参謀長がそそのかしたようで。」

「250億の帝国臣民に奴らの残虐さを示すためとはいえ250万の虐殺を許すというのか。」

「申し訳ありません!小官がもう少し早く動けば……。」

ロルフ・オットー・ブラウヒツチ少将がキルヒアイス達に頭を下げる。結城侯 友奈からの命令をキルヒアイスが受け、ヴェスターラントへの救援として向かわせたのが彼の艦隊だったのだ。

「ブラウヒツチ少将、卿が謝ることではない。そもそも総参謀長が、あやつが嘘の情報を

流したのが悪いだろ。」

ルッツが擁護する。

「皆さんは結城元帥府の将官たる一員です。つまり元帥閣下の『家族』であるというこ
とです。ですから私はあなた方を信じてこの情報をお話ししましたが、外部には漏らさ
ないようお願いします。兵士達の士気に悪影響を及ぼしかねません。」

「はっ！」

「しかし司令官は如何されるおつもりで？」

「しばらく閣下には近付きません。私も閣下も頭に血が上り口論になってしまいまし
た。今お話しに行っても同じ結果になるだけです。」

「確かに。一旦頭を冷やす。冷静な判断ですな。」

戦艦 ベルリン 艦橋

「征け！総員死兵となって戦え！」

戦艦 ブリュンヒルト 艦橋

「やはり出てきましたな。」

「予定通りだね。メック君、ウルリツヒ君、ミユラー君に迎撃させて！」

戦艦 ヴィルヘルミナ 艦橋

「閣下、付け入る隙がありません！」

「怯むな。いくら犠牲を出そうと構わぬ！」

「意外にしぶとい・・・。」

「追い詰められ窮鼠と化したのでしよう。」

「うん。敵の突撃はこれで5回目だったね。」

「御意。」

「そろそろだね・・・。」

「敵がまた攻勢に転じました！」

「よし。前衛の3艦隊に一気に敵を押し戻させよ！」

「・・・敵の攻勢が限界点に達したようです。」

「今だ！全艦突撃、最大戦速！全艦隊、我に続け！」

「我らも追撃態勢に入るとしようか。」

「……。」 敬礼

「……。」 敬礼

「艦隊を密集させよ。最後尾を守る。」

「はっ！」

「やはり結城侯は前線に立たれてこそ輝かれる。お淑やかにというのはあの方には些か無理な話だ。キルヒアイス提督あたりは嘆かれるだろうがな……」

ブリュンヒルト 艦橋

「始まったようです。」

ガイエスブルク要塞　主砲“禿鷹の鉤爪へガイエス・ハーケン”
制御室前の廊下
において銃撃戦が繰り広げられていた。

「我々は結城侯に味方すると決めた者だ！主砲制御室を守る兵士たちよ、ヴェスタラーントを見ただろう！武器を向けるべき相手が一体誰かよく考えるんだ！」

「潜入させておいた者が、要塞主砲の制御室を占拠したとのことです。」
「揚陸艦を出して要塞を制圧させよう。」

「はっ。」

「ブラウンシュヴァイクを逃すなよ。」

帝国暦156年9月、ガイエスブルク要塞は落城し、リツプシュタット貴族連合軍はここに壊滅。人類史上最大の内乱が終結した。

ガイエスブルク要塞　大広間

諸提督達の事務が一段落すると、結城侯友奈は全員を集め戦勝式典を開催した。まずは逮捕者の引見が行われた。

「元帥閣下、入られます！」

「……。」「……。」「……。」

「……。」答礼

「ではまず逮捕者の引見から始めさせていただきます。」

逮捕者の引見は恙無く進み、最後にキルヒアイスが懸念していたアンスバツハ准将が連れてこられた。キルヒアイスは事前にケスラーにお願いし嚴重にボディーチェックを逮捕者にさせていたので心配はしていないが油断もしていない。アンスバツハの有能さは内外に知れ渡っていたのだから。念のため勇者変身端末を構える。

「ふん。主君の遺体を手土産に降伏するとはな。」

ビットテンフェルトが嘲るが誰も止めない。友奈に一礼したアンスバツハはブラウンシュヴァイク公の入った棺を開ける。そこにはミサイルランチャーが入っていた。アンスバツハがランチャーを構える。キルヒアイス以外は呆氣に取られて動けない。

「(ボディーチェックに気をとられて棺までは見なかつたか!) 友奈様!」変身

「結城侯、我が主君の仇を取らせていただく!」

変身したキルヒアイスは盾を構えたままアンスバツハにタックルした。

「アンスバツハ准将もう終わりです。こんなことをしても……。」

「問答無用!」拳銃型麻酔銃を出す

「(あれは対勇者鎮圧剤! なんてそんなものを彼が……まさか?!)……友奈様!」友奈を庇う

プスッ

「ぐっ……。」吐血

「何をするか!!」

「貴様アーツ!」アンスバツハを取り押さえる

「友奈様……ご無事ですか……?」

「うん。ジークのお陰で大丈夫だよ。それより今医者が来る。もう少し持ちこたえて!」

「駄目です……対勇者鎮圧剤は恐らく原液でした。もう……私は……友奈様のお役に立てそうもありません……お許し下さい……」

「馬鹿!何を言うの!もうすぐ医者が来る!こんな傷はすぐ治る!治ったらお母様の墓と一緒に勝利の報告に行こう!ねっ!そうしよう!」

「友奈様……」

「医者が来るまで喋っちゃ駄目だよ!」

「宇宙を……手にお入れ下さい……!」

「うん……うん!勿論だ!ジークと一緒に!」

「それと……東郷大将にお伝え下さい……『キルヒアイスは昔の誓いを守った』と……!」

「やだ！私はそんなことは伝えない！ジークの口から伝えるんだ！ジーク自身で！私は伝えたりしないよ！一緒に母さんのところに行くんだ！ジーク！」

「・・・」息絶える

「ジーク！返事をして！ジーク！何故黙ってるの!!!」

「駄目です。亡くなりました。この上は、せめて安らかに。」

「嘘をつくなミッター君・・・いくらミッター君でもそんな嘘は聞けないよ・・・。」

「ですが・・・。」

「ジークが私を置いて先に死ぬ訳ないんだ・・・！ねっ・・・！ジーク！目を開けてよ！

ジーク・・・。」

ジーク！

我が友

ガイエスブルク要塞 大会議室

「……閣下のご様子は？」

「相変わらずだ。キルヒアイスの亡骸をずっと抱き抱えておられる。」

「……しかし、結城侯にそれほど脆いところがあたりとは思わなかった……。」

「違うなミュラー。俺や卿が死んでもああおなりではあるまいよ。ジークフリード・キルヒアイスは特別だ……特別だった……。」

「それを言っても仕方あるまい。問題はこれからどうするかだ。」

「結城侯には立ち直っていただく。立ち直っていただくかねばならん。さもないと我ら全員銀河の深淵に向かって滅亡の歌を合唱することになる。」

「だがどうやって立ち直っていただく？」

「……どうすべきか……。」

「総参謀長閣下、おみえであります！」

「何の用だこんな時に。」

「卿らの討議も長い割に、中々結論が出ないようだな。」

「何!!」

「まあ待てミッターマイヤー。目下我々はN.O. 1、N.O. 2がおらず、纏め役に欠けるのでな。」

「……。」

「で、参謀長殿には良い思案がおりかな?」

「無いでもない。」

「ほう……。」

「東郷大将以下勇者の方々にお願いする。」

「現職勇者達か……それは我々も考えたが……。」

「どうやら誰も、報告する役を引き受けなかったようだ。それは私が引き受けるが、卿らにもやって貰うことがある。」

「「?」」

「キルヒアイス提督を殺した犯人を捕らえるのだ。」

「「?」」

「犯人はアンズバッハではないか。」

「奴は実行犯に過ぎん。真の犯人は別にいる。大物がな。」

「それはそうだが、ブラウンシュヴァイク公は既に死んでおるし……。」

「ブラウンシュヴァイク公のことではない。」

「「?!」」

「どういふことだ?」

「誰が犯人だというのだ!」

「帝国副宰相 兼 財務尚書 レムシャイド伯。」

「「!!」」

「この危機を逆用し、潜在的な敵を排除しようと言うのか?」

「そうだ。」

「卿を敵に回したくは無いものだ。勝てる筈が無いからな。」

「財政のほぼ全権を掌握しているレムシャイドは遅かれ早かれ始末しなければならん。それはレムシャイド側とて同じこと。今回のリップシュタット戦役においても奴がブラウンシュヴァイクヤリッテンハイムと裏で繋がっていた証拠は既に上がっている。何より今回の戦いを通じて我らの力を削ぎ隙を見せるであろう元帥閣下を機を見て失脚させようと宮廷工作をしているに違い無いのだ。可能な限り迅速にオーデインに戻りレムシャイドを逮捕し、財政権に関する国璽を奪うのだ。さすれば結城侯の独裁権を確実に手中にすることができると。権力とはどのようなように獲得したかではなくいかに行使したかによって正当化されるのだ。それがわからない卿らではないだろう。」

「陰謀も詐術もこの際やむを得んな。」

「これを機に結城侯の敵を一掃し全権力を奪取する！」

「異存は無いな？」

「「応！」」

戦艦 バルバロッサ キルヒアイスの執務室

主を失ったキルヒアイスの執務室にはキルヒアイス麾下の少将以下の幹部たちが集まっていた。ベルゲングリユーン、ビューロー、ジンツァー、ブラウヒツチ、ザウケンである。

「・・・俺達ばかりずっと落ち込んでいても仕方ない。生きている俺達はもうヴァルハラ

におられるであろうキルヒアイス閣下の御為にも早く立ち直り元帥閣下をもり立てて
いかねばならん。」

「そうだな、ビュローの言う通りだ。一応確認しておくが俺以外にキルヒアイス提督
から小袋を託された者はいるか？俺はひとつ預かっているが？」

「ベルゲングリユーン俺は二つ預かっている。卿も同じような命令を受けただろうが俺
はキルヒアイス提督から自分が何かあつた際はそれを開けるようにとご命令を受けて
いる。」

「俺も同じだ。なら開けてみるか。」

3つの小袋の中身は遺書だつた。ベルゲングリユーンのもは麾下の幹部達に対す
る感謝の言葉と先に置いていつてしまった自分のミスに対する謝罪の手紙だつた。一
方ビュローのものは……

『私、ジークフリード・キルヒアイスは フォルカー・アクセル・フォン・ビュロー
を代理人としオーディン膠原病研究所に対し我が財産の半分を寄付すると共に残りの
半分を両親に配分することをここに宣言する。』

帝国暦156年8月15日 『ジークフリード・キルヒアイス』だそうだ。」

「ビュローに任せたのか。最後まで信じられていたなビュロー。」

「そうだなベルゲングリユーン。ありがたいことだ。」半泣き

「しかし、何故膠原病研究所に寄付なのだ？」

「わからん。だがオーデインに戻ったら遺漏無く執行しよう。」

「ああ。最後の中身は何なのだ？他二つに比べて少々大きいが。」

「・・・元帥閣下への遺言が入った木箱だ。こいつは中身を見ずに閣下にお渡ししよう。」

「……」

結城友奈は打ちひしがれていた。対勇者鎮圧剤といつても所詮麻醉銃、弾速は大したことないのだ。避けることは容易かつたし、何よりキルヒアイスの性格から暗殺者の排除より身を挺して自分を護ることを選択することに疑う余地は無い。なのに動けなかつた。艦隊戦はともかく勇者としては鉄火場を離れすぎていたが故に野生の勘が鈍ってしまった。否、鉄火場といつても基本キルヒアイスにヘイトを頼み自らは止めを刺していただけだつた。信頼できる“家族”はまだいる。彼ら彼女らの為に自分はまだ戦える。だがもう最大の親友は去り、自分の膝枕で冷たくなつてしまった。

「閣下、ビューローであります。キルヒアイス提督の命により遺言を預かつております。

ご確認いただけますか？」

「……」。黙つて受け取る

「では失礼します。」敬礼

友奈様、こうして私の手紙をお読みになつていくことは、既に私はこの世にいないでしょう。それと私の遺言を遺漏なく執行してください。ベルゲングリーン准将とビューロー准将に後でお礼を言つておいていただけると幸いです。重ねて申し上げます。友奈様、勝手に貴女の下を去つたことをお許しください。そしてお礼申し上げます。

12年前、私を拾つてくださり本当にありがとうございました。貴女の隣で戦えたことをとても名誉に思います。そしてお願いです。友奈様に秘密で私は膠原病研究所に投資を行つておりました。これは私の勘に過ぎませんが友奈様のお父君も早くに亡くなつてしまわれ、その原因は遺伝系の疾患ではないかと考えていたのです。友奈様も同じ轍を踏むことがないように状況が落ち着き次第膠原病研究所に問診に出かけてくださいますよう謹んでお願い申し上げます。それと宇宙を手に入れた後のことなのですが、レンネンキャンプ提督とロイエンタール提督をなるべく友奈様から離さないように、手元に置いておくようお願いいたします。レンネンキャンプ提督は強い上司に手綱を握られてこそ能力を発揮するタイプですし、ロイエンタール提督の場合、彼は友奈様を裏切ることはないと思いたいですが野心がある人物でありまたそれにふさわしい実力を備えています。どうかこの両名を信用することはあつても手元から離さないようお願

い致します。

そして帝国臣民たちに対しては優しく太陽のように統治してくださいますようお願いいたします。適者生存・優勝劣敗など乃木若葉以降150年続いてきた乃木王朝で十分です。友奈様が帝冠を被った暁にはそのような苛烈な統治をなさらないようお願いいたします。

先に逝った身で申し上げることはありませんが、前を向いてお進みください。無力ながらヴァアルハラから貴女を見守り奉っております。

今まで本当にありがとうございます。我が愛する主君、親友、友奈様。

ジークフリード・キルヒアイス

「うん。わかったよジーク。ジークは約束を守った。私も誓約を果たそう。後ろばかり向いたりしない。東郷さんと皆で前に進むよ。」

ジークフリード・キルヒアイスは勇者である

「ジーク！」

「どうしたの友奈？」

「お母様が玉ねぎのパイを焼いてくれたよ！一緒に食べよう！」

「うん！」

「もうあなた達何をしてるの！冬の噴水に落ちるなんて！」

「ごめんなさいお母様。」

「申し訳ありません。私が目を離したばかりに。」

「ジークフリード君は大丈夫よ。友奈がおバカさんなだけなんですから（笑）」

「ジーク……お母様が戦死したって……。」

「友奈……。」友奈を抱き締める

「皆私を置いて逝く……もうジーク以外誰もいないよお……。」啜り泣く

「大丈夫だよ友奈。僕がずっとそばにいるから。」

「うん……。」

「単なる野心家に過ぎなかった乃木若葉が、一代で『神聖不可侵』などと称する銀河帝国皇帝にまでなりおさせた。なら、私にできない道理は無い筈だよ！」

「はい！宇宙を手にお入れ下さい、友奈様。ジークフリードは、貴女についていきます

！」

「お分かりの筈です。友奈様には。10人の提督の反感も、助けられた数百万将兵からの感謝に比べれば、取るに足りません。」

「そうだね、その通りだ。」

「宇宙を・・・手にお入れ下さい・・・！」

私には親友がいた。燃えるような赤毛で、誠実で、のっぽで、ずっと私についてきてくれた。

銀河が敵になっても私に味方してくれる確信と信頼があつた我が友。ジークフリード・キルヒアイス。

私が両親以外に愛した唯一の友。ありがとう友よ。私は他ならぬ君の為に、前に進むよ。ヴァルハラから見守っていてね。何としてでも誓約を果たすから。

「三好少将、お怪我はありませんか？友奈様の命により援護に参りました。」

「お金を借りたい？幾らお貸しすれば？」

「三好少将、感謝は無用です。『仲間は助けよ』と友奈様のご命令に忠実に努めているだけですから。」

「少将を私がどう思っているか、ですか？頼もしく美しい同期です。え？それ以外に無

いのか？そうですね・・・才覚もあり努力も怠らない私が見習うべき勇者です。何より三好少将は帝国の為に剣を振るえる勇者の鑑です。私は今までも、これからも友奈様の御為にしか戦いませんし戦えませんから。」

気に入らない奴。私が何度挑んでも勝てなかった赤毛ののつぽ。何度危機に陥つても助けてくれたお人好し。同期の桜とはいえ、いっつも突っ掛かってきた私に無利子無期限で大金を貸す大馬鹿者。私を「三好家の次期当主」ではなく「三好夏凜」として見てくれた初めての男。なんで先に逝ってしまった?!私が想いをぶつける前に!もつと言いたいことがあったのに!もつと強くなつてぎつたぎつたにしてやりたかったのに!皮肉なもんね・・・あんたが死んでからあんたの亡骸の前で初めて本音が言えたんだから・・・ごめんキルヒアイス。私は・・・あんたが大好きだった・・・

「犬吠埼候補生、よろしければ私がお教えします。」

「犬吠埼少将の泣き虫は悪いことではありません。他者を慈しめる心があるということではありませんか。それはむしろ良いことです。」

「友奈様の勤に従って援護に参りましたが、無駄にはなりませんでしたね。ご無事です
か犬吠埼少将？」

いっつもお姉ちゃんの影で小さくなっていた私をそれとなく訓練をしてくれたり、弱さを肯定してくれた赤毛の男の子。私を「勇者 犬吠埼樹」ではなく「犬吠埼樹」として見てくれた、私よりずっと大きかったのに威圧感の無い優しい雰囲気でも話が出来たお姉ちゃん以外の初めての人の。私の王子様。キルヒアイス提督。なんで逝っちゃったの？私が想いを伝える前に・・・

「東郷候補生、もうやめて下さい。お身体に障ります。こんなに飲んでしまつては…。」

「東郷少将は私以外のはじめての友奈様の親友です。それだけで、命を投げ出して守る理由には十分です。」

「三ノ輪上級大将閣下とて、東郷中将を責めたりはしないでしよう。東郷中将は、三ノ輪上級大将閣下の分も生きて、何十年か後に胸をはってヴァルハラで再会すれば良いのです。亡くなられた閣下も、それをこそ望みましよう。」

銀を自分のミスで失い、そのつちは皇帝に即位してしまい、私の元には誰も残らな

かった。目をかけて下さったグリーンメルスハウゼン閣下も肺炎で亡くなられた。身寄りも無くやさぐれ黒ビールの海を彷徨っていた私を、二人は陽の光のような暖かい手で救いだしてくれた。友奈ちゃん、キルヒアイス。私にとってあなた達は私に舞い降りた黄金の翼を持った天使だった。キルヒアイス・・・あなたがいないと背中がとても寒い・・・もう家族を失いたくなかったのに・・・

「犬吠埼候補生は立派な姉であり、15期の総大将です。ご自分に自信を持って下さい。」

「犬吠埼大将、それは違います。犬吠埼中将とて貴女の過保護にうんざりはしていても嫌がってはいません。」

「犬吠埼大将、ご無事で?!」

要らんお節介から始まって、無関係なのに喧嘩した樹との関係修復に態々奔走してくれたり、部長として至らない私をそれとなくフォローしてくれたり、ヴァンフリートで追い詰められた私を助けてくれたり：キルヒアイスは、なんで恩を返す前に死んじやつたのよ・・・!

「事情はオーベルシュタインから聞いて承知している。」

「はっ。」

「みんなの働きには厚く報いるよ。私もこれからオーディンに帰還する。迎えに誰か一人寄越してほしいな。」

「はっ。ではミッターマイヤーを。」

「うん。」

「ところで、レムシャイド伯の一族はことごとく捕らえてありますが、いかがいたしましよぶっ。」

「仮にも副宰相たる方を死刑にはできない。自裁をお薦めして。」

「御意。で、一族は？」

「何らかの犯罪を起こした或いは関与していた者に対しては死刑、そうでなかったもの

は辺境に流刑。」

「はっ。罪無き者は例外無く流刑でよろしいのですね？」

「罪なき者を処断してしまつてはジークに何を言われるかわかつたものではないよ。よつて命は取らない。もし勢力を巻き返し私を討とうとするならそれも良い。実力のない覇者が打倒されるのは当然のことだからね。」

「……。」

「オスカー君達も同様だよ。私を倒すだけの自信と覚悟があるのなら、いつでも挑んで来て構わないよ。」

「ご冗談を。」

レムシャイド伯を倒し、首都星オーデインに戻ってきた結城侯 友奈は、三ノ輪宰相から宰相の地位を引き継ぎ、また引き続き帝国軍最高司令官の職も兼任しつつ公爵に昇り名実ともに銀河帝国の頂点に立った。

だが、いつも彼女の右後ろにいた赤毛の友がいない。
「.....」

宰相になった結城公 友奈は生前に遡り、ジークフリード・キルヒアイスに帝国軍三長官の地位と元帥の称号を与え、生前の功に報いた。だがその程度で自分への献身に対する十分な褒賞であったとはとても言い難い。何より彼が望んだのは自分のそばに

ずっといることであつた。せめてそれを叶えてあげたいと思い、自分の住処であるシユワルツェンの館の正面玄関、その脇にある花畑に彼を丁重に葬つた。墓碑銘は彼の肖像と生没年、そしてたった一言だけである。〈Mein Freund〉（わが友）であつた。

「もう失うものは何も無い。奴らを滅ぼし宇宙を手に入れて、みんなでまた暮らそう。」

また、新たなる戦いが始まる。帝国暦154年3月、まだ肌寒い晴れの日であつた。結城友奈は17歳になつたばかり。彼女の戦いは、もう一度ここから始まる。

Ⅲ 大満開の章

Ⅰ節 誓いを胸に

立ち止まってはもらえない！

帝国暦157年

11月3日

軍務省 第13会議室

リップシュタット戦役に伴う軍の混乱が収まり、新しい提督達の任用、新しい人事異動により以前より帝国軍は強化された。それに伴いバーテックス領に侵攻し領土を回復、宇宙に平和と統一をもたらすべく『ラグナロク作戦』の人事が結城公友奈から諸提督達に下令された。

「まずイゼルローン方面に向かって3個艦隊を動かす。このイゼルローン方面軍の総司令官はオスカー君に。副司令官にレンネンカン、先輩ルッツ君の両名に任せる。同時にフェザン回廊から本隊を送り込む。この本体の第1陣はミッター君に任せる。第2陣ミュラー君。第3陣は私が自ら指揮をとる。直属部隊にはアルトリンゲン、ブラウヒッチ、カルナツプ、グリューネマン、トウルナイゼン。各中将が指揮する艦隊を配する。第4陣カール君、第5陣ワーレン君、第6陣アイゼナツハ君。フリッツ君とアール君は戦況に応じて戦線に参加すること。第7陣 兼 後方総司令官はメック君に。

補給に関する任務は一任するから宜しくね。」

総旗艦ブリュンヒルトには

参謀総長 兼 軍務省次官 オーベルシュタイン上級大将

主席副官

シュトライト少

将

次席副官

リュツケ大尉

親衛隊長

キスリング大佐

宰相付主席秘書官

ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ

が結城公 友奈の補佐として乗り込む。

「ウルリツヒ君は帝都防衛司令官として東郷さんと協力してオーデインを守るように。芽吹ちゃん以下防人艦隊はオスカー君に先んじて出撃しヴァンフリート4―2に基地を建設、バーテックスが来ない内に無理の無い範囲で駒を進めるように。作戦発動はオスカー君のイゼルローン方面軍の進発を以てとする。以上、解散。」

軍務省 士官用バー //海鷲

「史上類を見ない出兵だが、今の我が軍の勢いであればバーテックスに勝つことも難しくはないだろう。正直俺は戦いそのものに対しては何ら不安は感じていない。だが問題は……。」

「そうだ、ロイエンタール。卿も感じてはいるだろう。公は、キルヒアイスが死ぬ以前と何かが違う。具体的にどこがどうとも言えんが変わってしまった。」

「ああ。先週ちようどこの場所だ。公務を終えられた公と一緒にサシで食事をしていたのだが、その時公がお食べになられていたのはあの方の大好物であった筈の山菜うどんだった。だがそれを食べても公の表情が変わらなかつたのでな。何事かと思ひ質問してみたのだ。そしたらどんな返事が来たと思う？」

『『全く味がしない。』だそうだ。キルヒアイスがあんな死に方をしてしまつてからずっとあの調子らしい。味覚が戻らないとな。』

「やはりキルヒアイスを失つたのは大きすぎたな。」

「正直な話、上司のそういう面に対して臣下たる我々が口を出していいのか分かりませんが、なんとか病院に行かれるよう我々で説得するしかないのではありませんか？」

「ミューラーの言う通りかどうか俺には分からないし、俺の食い物に対する価値観と閣下の食い物に対する価値観が同じとも無論限らないが、ただでさえキルヒアイスが隣にいないストレスと、食い物の味もわからないストレスでこのままだと負の連鎖が起きてしまう。いやもう既に起こっているか。なんとかこの連鎖を断ち切れないものだろうか。」

「とはいってもなビツテンフェルト、政治上軍事上を問わず実務的な意見であればあの方は受け入れて下さるだろうが、プライベート関係の意見に関しては俺達ごときの意見は受け入れられないだろう。それに閣下は病院嫌いであらせられる。この前膠原病研究所に赴かれたのもキルヒアイスの遺言があったからであって、あの方が自ら進んでというわけではなかったようだしな。」

「うーむ。私がまだ一介の大佐に過ぎなかった頃、まだ中佐だった閣下と共に仕事をしていたが、その頃以上にどうもワーカホリックになってしまっておられる感が私からすると否めない。キルヒアイスが死んでからずっと働きっぱなしではないか。」

「レンネンキャンプ提督のおっしゃる通り。キルヒアイス提督が以前私に教えてくださったのですが、閣下はどうにも無趣味で貧乏性なところがありませんでした。唯一の趣味と

言っている押し花もキルヒアイス提督が勧めたものに過ぎずあの方ご自身が進んでやっておられたというわけでもないですからな。詮無い話になります。3年前にあの方から直接頂いた四葉のクローバーの葉ですが、今も本を読むときに使わせて頂いてますよ。」皆に見せる

「芸術家であり読書家でもあるメックリンガー提督にとつては望外のプレゼントだったなあそれは。」

「うむ。」

「確かに公のことも気にはすべきでしょうが、とりあえず艦隊の整備に努めましょう。総参謀長殿はともかく、公の周囲についてはシュトライト少将とキスリングに一任しましょう。あの二人なら安心して公を任せられます。」

「ミユラーの言う通りだな。ひとまず武人としての義務を全うしよう。全てはそれからだ。」

帝国暦157年11月10日

帝国軍は150年にわたる戦乱に終止符を打つべく出発した。総兵力20万隻、約3

000万人を投入し帝国軍は歴史のページを捲る為大海へと旅立った。

「友奈ちゃん、どうか無事に帰ってきて・・・。」

不思議な夢

「我々が思うに乃木王朝が決定的に衰退する機会になったのは他ならぬ第二次ティアマト会戦であつただろう。どういふことか。丁度この戦いにおいて旧帝国軍は60名もの将官級の戦死者を出し、『軍務省が涙すべき40分』と言われたこの戦闘の結果、領地貴族の跳梁を許し結果的に乃木王朝は土台から腐敗する事になってしまったのである。この戦いがなければ私達の主君は乃木王朝から帝位を譲られることはなかつただろうし、社会の公正化もバーテックスとの戦いの終結も無かつただろう。歴史は、今までの業の積み重ねである。それを学ぶことは決してマイナスにはならない。」

メックリンガーとキルヒアイスの共著『乃木王朝末期と結城王朝黎明期の分析』挨拶より

ブリュンヒルト 結城友奈の執務室

ラグナロク作戦が発動され、フェザン回廊に向かう道すがら、結城公 友奈は、秘書官たるヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ、新たに迎えた従兵エミール・フォン・

ゼツレとココアを酌み交わしていた。

「私は呪われた生まれつきなのかもしれないねヒルダさん、エミール。」

「え？」

「平和よりも戦いを好んでいる・・・流血によってしか人生を彩り得なくなっている。或いは他にやりようがあるのかもしれないのに・・・。」

「でも、それは閣下が宇宙の統一と平和を願っていらつしやるからではありませんか？統一と平和が成れば、自然に平和になります。それに弱気になったら、本当に別の銀河系にいらつしやればよろしいではありませんか？」

「・・・。」

「・・・ありがとうエミール。出会って幾ばくも無いのに君は私のことを本当によく想ってくれる。私は、私を想ってくれる者達を幸せにしてあげたい。」エミールの頭を撫でる

ここは・・・バイエルの執務室・・・お母様の艦だ・・・なんで・・・

友奈・・・

お母様・・・？

久しぶりね。12年ぶりになるかしら？

はい

私よりもずっと若いのにもう元帥にまでなったのね・・・でもあまり変わってないわね？

・・・変わりましたよお母様。変わらざるを得なかったのです。昔のように、自分の愛情と熱意がその対象となる人々の幸せを約束すると信じることは・・・できなくなりました。

・・・
私の覇道を阻むのはバーテックス、そして天の神だけとなりました。必ず奴らに今までの流血に相応しい代償を払わせます。ですが、その後どうするべきか、わからないのです。キルヒアイスはもうそちらに居るのです。私は一番失いたくないものを失いました。私はどうすれば・・・

・・・精一杯命を燃やし悔いの無いようにへ自分の為に生きなさい。ジークフリード君から貰った命だからね。私は死んで尚娘に説教はしないと決めてるから、これ以上は何も言わないわ。

・・・わかりました。そちらに合流するまで、そうします。キルヒアイ스에宜しくと伝えて下さい。

わかったわ。頑張りなさい、私の愛しき娘。

「閣下。」

「・・・うん・・・シユトライト君、ごめん。寝ちやつてたね。」

「お疲れのところ申し訳ありません。ミッターマイヤー提督から連絡が入りました。5000隻規模の敵艦隊2個を撃破し惑星ウルヴァシーを制圧、現在橋頭堡を建設中とのことです。」

「うん。ミッター君には無理をしないよう伝えて。」

「はっ。」 退室する

「・・・。」 外の宇宙を眺める

「お母様、お父様、ジーク。私は、ついてきてくれる者達を幸せにできるかな・・・？」
首のロケットを触る

帝国暦157年12月3日、ラグナロック作戦は順調に進行していた。だが現在の戦況は謂わばバーテックスの家の玄関に押し入っただけである。これからが本番であった。

ジークフリード・キルヒアイスを失って凡そ2年。結城友奈は、歴史を作る為に前に進み続けていた。

IV 花結いの章

会いたい・・・

新帝国暦4年1月1日 新無憂宮 黒真珠の間

「諸君のお陰でまた大過無く新年を迎えることができた。改めて礼を言う。ありがとう。では新年を祝って・・・乾杯。」

「[[Prosit!]]」

皇帝寢室 バルコニー

「はあー。」

「陛下、こちらにおられましたか。」

「・・・ミッター君。」

「今年はキルヒアイス提督の5回忌ですな。」

「・・・うん。あの時出会った4人はもうミッター君と私だけになっちゃった。ジークが

生きてたらオスカー君を叛乱してと言わんばかりに新領土総督なんかにはしなかった。ジークを失ってからの私はミスばかりだった。そんな私を見捨てずに補佐してくれて本当にありがとうミッター君。」

「そんな・・・恐れ多いことです。」

『大事なものは失ってからその価値に気付く』ってお父様は生前教えてくれたけど、本当に・・・ぐすつ・・・ごめんね・・・うつ・・・ジーク・・・。」

ミッターマイヤーはカイザーにかける言葉が見つからなかった。ジークフリード・キルヒアイスと彼女の絆は、当事者だけにわかるものであり、部外者とは言い難い仲のミッターマイヤーも流石に発言を憚らざるを得なかったのである。またロイエンタールの件も口には出さなかった。親友には強大な敵と戦い華々しく散りたいと、破滅願望があったなどとはとてもではないが言えなかった。

(神樹様、願わくば今まで頑張ってこられたマイン・カイザーに褒美を与えたもう！)
ミッターマイヤーはそう神樹に祈るしかなかった。

ピカツ

「なんだ？」

「えっ？何？」

突然カイザー友奈の身体が神々しく輝きだした。

「陛下！」

ピカッ

カイザー友奈が一瞬閃光弾並の輝きを放ち、ミッターマイヤーは目を瞑らざるを得なかった。

「うっ！陛下！御無事ですか！」

気がつくくと結城友奈は寢室のバルコニーではなく、結城元帥府の大会議室に居た。しかも髪の長さも元帥時代に戻り、軍服も元帥の制服になっていた。

「うん？(´▽｀)は？」

「陛下？」

「樹ちゃん？」

軍服を着た犬吠埼樹大将が居た。おかしいとカイザー友奈は思った。彼女は既に軍を退官、歌手 兼 学芸尚書として専ら地方で幅広く活躍していた筈だ。オーデインには絶対いはずなのだ。

「友奈（ちゃん）？」「」

「部長と夏凜ちゃんに東郷さん!？」

おかしい。軍を既に退官している勇者の面々がなぜ現役時代のように軍服を着て円卓に座っている。そして一人だけ知らない人物が円卓に座っている。誰この人？とカイザー友奈は思い、質問した。

「あのくすいません、あなたはだくれ？」

「申し遅れましたカイザー友奈陛下。私は上里ひなた。前王朝の初代軍務尚書 兼 初代巫女でございます。お見知りおきを。」

「!?!」

「突拍子も無いことを言ってるなと思われるのも無理はありません。ですが皆さんいきなり身体が輝いてここに飛ばされたわけではありませんか?」

「・・・皆もそうだった? 私はミッター君と話してたらいきなり身体が輝いて気付いたらここにいたんだ。」

「私も。」

「「右に同じく。」」

「確認がとれたところで皆さん、右のポケットを確認してみてください。」

「?・・・え?なんで勇者変身用端末が!」

「ここからが本題です。ここは現実の世界ではなく、神樹様の中の世界です。皆さんの時代、新帝国暦1年の末に、バーテックスと天の神は倒され、人類に平和が訪れました。ですが・・・。」

「神樹様の中の一柱が他の土地神様と人類の経営方針で対立、話し合うも折り合えず、他の神々と抗争を始めてしまったのです。これを黙認してしまうと、せっかく安定した人類社会にも、著しい悪影響が及んでしまいます。それを止めるべく、皆さんがこの世界

「に特別召喚されたのです。」

「でも私勇者辞めて久しいからあまり役に立てませんよ?」

「大丈夫です樹さん。皆さんの頭の中の記憶は新帝国暦4年時点のものですが、身体は最盛期・・・旧帝国暦154年時点のものですから、戦えるはずですよ。それと・・・これをご覧下さい。」ホロデイスプレイを起動させる

「銀河の全体見取図か。」

「はい。蒼く表示されているのが神樹様の支配がまだ行き届いている星系、赤が造反神が占領している星系ですよ。」

「首都星オーデイン以外ほぼ全部占領されてんじゃん!」

「はい。このままでは人類は滅びはしないでしょうが、酷いことになるのは明白ですよ。お願いします。皆さんのお力をお借りしたいんですよ!」

「・・・しようがない。勇者部、久々に出動するけど、皆大丈夫?」

「はい!」

「っていうわけで、陛下にもご足労いただきますが、よろしいでしょうか?」

「部長、ここには私達しかいないからいつも通りで良いよ?」

「わかったわ友奈。じゃあ、勇者部、久々に・・・ファイトーツ!」

「ファイトーツ!」

「この世界は神樹様の中の特別な世界です。現実の時間は皆さんが戦い終わるまで停止し続けますので安心して下さい。それとカイザー友奈陛下、神樹様直々にあなた宛の預言です。『戦いが終われば、我らは力を取り戻す。人一人を黄泉国から呼び戻す位なら頑張ればできる。会いたくは無いか？赤毛の友と？』だそうです。」

「一・二」

「では皆さん、頑張ってください！私も微力ながら精一杯皆さんをサポートします。」

番外編 1 どっちがどっち？

結城元帥府 大会議室

「あなた達本当に双子じゃないの？」

「双子じゃないよー。」

「時代も違うよー。」

「ねー。」

「赤の他人にしては息ぴったりだし。」

高嶋友奈 元帥とカイザー友奈は本当にそっくりである。軍服・髪型を変えればわからなくなるであろう程に。

「でー、ちよつと試したいことがあるのー。」

「何を思い付いた？ どうせまたロクでもないこと思い付いたのだろうが・・・。」

「若葉ちゃん、ひとまず聞いてあげましょう。それからでも遅くはないと思います。」

「そうだなひなた。で園子、何をする気だ。」

「はーいご先祖様。ゆーゆとたかつしーを服も髪型も入れ換えてわっしーとキルヒアイスにどっちがどっちか見分けさせてみたいって思っつて〜。」

「またロクでもないことを・・・。」

「郡 上級大将、楽しいことになりそうですからひとまずやらせてみましょう。」

「お待たせ！ここで問題です。どっちが高嶋で、どっちがカイザーでしょう！」

「まだ東郷 上級大将とキルヒアイス元帥が戻ってきてないから、郡 上級大将にどっちが高嶋 元帥が当てて貰います！」

「そうね・・・こつちが高嶋さんね。」左を指差す
「凄い！どうしてわかったの？」

「・・・見ればわかるわ。高嶋さんなら。」

「流石千景さんですね。」

「申し訳ありません。遅れました。」

「おやつができましたよ。」

「ほーいお疲れー。でねーキルヒアイス 元帥、東郷 上級大将、ちよつとこつち来て。」
「なんでしよう園子様。」

「どっちが高嶋 元帥で、どっちがキルヒアイス元帥の主人でしょう!」

「こちら(こつち)が友奈様(ちゃん)です。」 即答で右を指す

「嘘!?一瞬で見破った!」

「馬鹿な!?ここまで分かりづらいのに!」

「何でわかったの?」

「逆に三好大将が何故わからないのか、私にはわかりかねます。」

「キルヒアイスあんたどうやって見分けたの?」

「犬吠埼 上級大将、友奈様には友奈様にしか無いオーラがあります。何より10年以

上ずつと離れず一緒にいたのです。見分けがつかない訳がありません。」

(早く結婚しろよこの馬鹿夫婦!)

一同はそう思わざるを得なかった。ここまでくると主従ではなく、夫婦の呼吸である。

「友奈様、やつとぼた餅の免許皆伝を東郷 上級大将からいただきました。これからは夕食のデザートにはぼた餅をつけられますが、如何致しますか?」

「付けて〜♪」

「かしこまりました。」

「楽しみだなくジークのぼた餅♪♪♪」

「なんで私達は元帥府でイチヤイチャを見せられてるのかしら・・・。」

郡 上級大将の何気無い一言こそ、そこにいたカイザー友奈とキルヒアイス以外の面々の本音であつた・・・

番外編2 バレンタイン

今年もバレンタインがやって来た。しかし、勇者部のバレンタインは通常と大分異なる。

勇者部の面々はこの特殊な世界では男性との出会いがまずありえないので同性同士で送り合うのが暗黙の了解となっている。

だが唯一の男性勇者であるジークフリード・キルヒアイス元帥だけは例外である。

キルヒアイスは、やはりその優しい性根からなのか律儀に全員分作るのだが、手間がかかるだろうに全員分一人一人全く違う贈り物を作る。

キルヒアイス自身、バレンタインはただただ主君（結城友奈）や同僚達へ日頃の感謝を表す日と考えている節があつたので、贈るのは何もチョコレートとは限らない。

だが、例年確実に最初にする必要がある。それは乃木園子を拘禁或いは軟禁することである。

他ならぬ彼女の先祖である若葉大帝が直々に彼女からメモ帳と筆記具を接收の上牢屋の見張りに立って貰うことで、メモに一語たりとも記入させない体制を整えているのである。以前、放置して書かせたらとんでもないことになり火消しが大変だったらし

い。

一例あげると、古波蔵棗 大将 × 犬吠埼風 上級大将の百合本がネットで拡散してしまい、統帥本部の情報処理課を総動員し幸いにも3日で鎮火できたが、若葉大帝から鉄拳制裁が下るのも無理からぬことであった。

「友奈様、今回のバレンタインは何なりと罰をお命じ下さい。私は、まだ無断で友奈様の下を去った罪を償っておりません。」 跪く

キルヒアイスは、確かにカイザー友奈を庇いアンスバツハの凶弾に倒れた。しかし友奈は、礼を言いこそすえ、罰する気にはなれなかった。だが、随分長い間寂しい思いをしたのも拭いがたい事実であった。そこで一つキルヒアイ스에頼むことにした。

「じゃあジーク、これからはどうしても私と離れないといけない仕事がある場合を除いて私が許さない限り絶対に私の半径3mから出ないこと。罰だから拒否権は無いよ。」

「・・・御意（これではくつつき虫だ）。」

「じゃあ一緒にお風呂入ろうジーク♪」

「……」

キルヒアイスは辟易していた。自分は前世と合わせれば90年以上生きている。今更バスタオル一枚で佇む主君に欲情などするはずも無い。だが心臓に悪いことに違いは無い。トイレにまで連れ込まれそうになった時は3m圏内で扉を閉めることができなかったので良かったが、まさか風呂まで連れ込まれるとは思わなかったのである。

「ジーク座って。背中流してあげる。」

「友奈様!?(流石にそれは断らねば!)」

「動いちゃ駄目。命令だよ。」

「……友奈様、本日は流石に命令を濫発し過ぎでは?」

「良いの！ジークのせいで6年も寂しい思いしたんだから、埋め合わせして貰うの！」
かつて以上に覇気に満ちたカリスマ的統治をするカイザー友奈。だがそれも自分が死んだ悲しみを糊塗せんが為の強がりであったことは、他ならぬキルヒアイス自身よくわかっていた。自身抜きでここまでやってこれたカイザー友奈である。キルヒアイスは目の前の親友へ向ける愛情を強くした。もう離れてはいけない、そう思っていた。
「友奈様……」。背中をゴシゴシされる

「ジークも大きくなつたね。昔は私の方が大きかったのに……」
ジークフリード・キルヒアイスは『赤毛ののっぽさん』と呼ばれる程に著しい成長を遂げていた。現在カイザー友奈は22歳、一度死に6年分のブランクがあるキルヒアイスは16歳。だがカイザーは身長156センチなのに対し、キルヒアイスは175センチ。歴然たる差ができてしまっていた。今更なことだがカイザーは拗ねてしまっている。

「機嫌をお直し下さい友奈様。上がりましたら、友奈様の大好きな手打ちうどんと、チキンのブルーチーズソース和えを作りますので。」

「ふん！」

「お気に 召しませんでしたか？」

「気に入らない。」

「・・・(苦笑)。」

「私を料理で釣れると思ってるジークの根性が気に入らない。」

「では私は先にながらせていただきます。友奈様のお食事を作るのはどうしても離れな
いとけない仕事ですから。」浴槽から出る

「・・・。」引き続き拗ねてる

「私を許して下さいましたら、下の食堂にお越し下さい。お待ちしております。」微笑む

軍務省（乃木園子拘禁用の）一室

「なんだかんだ言つてそんな関係じゃないように見せかけて結構イチャイチャしてるね。」

「おいおい園子、大丈夫なのか？単純な大帝は騙せるだろうが、上里軍務尚書を騙せるとは思えん。どうカモフラージュしながら盗聴・盗撮するつもりだ？」

「ミノさん大丈夫だよ。動画見てるふりしていつでも画面を変えられるように工作はばっちりだから。」

「もう最悪だ。こんなことに付き合わされるとは……。」

恋愛小説（笑）の制作とバラ園の運営だけが趣味である前王朝最後の皇帝乃木園子と、彼女の皇太子時代（現役勇者時代）からの悪友である三ノ輪銀 上級大将が、カイザー友奈とジークフリード・キルヒアイスの私生活を盗聴器・盗撮用小型カメラで逐一観察しているのだ。当然三ノ輪 上級大将とてこのような工作に手を貸したくは無かったが、若葉大帝×自分の百合本を流出させると脅され仕方なく手伝ってしまったのだ。

「ウオーツ！」

「どうした園子？……ってマジかよ。そりや皆馬鹿夫婦って言うわな。」

バスタオルを巻いているとはいえ、カイザー友奈とキルヒアイスが当たり前のように混浴している。これは皆が馬鹿夫婦と言うのも無理からぬことであると三ノ輪 上級大将も呆れざるを得なかった。

「これはもう キルヒアイス×ゆ〜ゆ で一冊書くしかないよー!!」
「いや逆に今まで書いてなかったのかよ!?!」

新無憂宮 皇帝寢室

「友奈様、よろしいですか？」

「お願いジーク。」

推奨BGM ベートーベン ピアノ・ソナタ第8番『悲愴』 第2楽章

「……。」Z z z z . . .

「友奈様、良い夢を。」掛け布団を掛け直す

後日、乃木園子がキルヒアイス×カイザー友奈の同人誌を500帝国マルクでネット小説サイトに売り出してしまい、それに気付いた郡 上級大将の通報で勇者部の面々の知るところとなり、東郷 上級大将にはしばき倒され、若葉大帝からはタイキツクされるのだが、それは別の話である。

番外編3 キルヒアイス提督の日常

「そういえば……。」

「どうした雪花？」

「それがね陛下、今更なんです。キルヒアイス元帥が寝てるのを見たことがある人っているのかな？と思ってます……。」

「少なくとも私とひなたは見たことが無いな。以前の慰安旅行でクロイツナハ皿に皆で行った際も見ることとは叶わなかった。友奈は見たことあるか？」

「ううん。私はジークとは長い付き合いだけど見たことないよ。そもそも子守唄代わりのピアノを弾いて貰ってるから私の方がどうしても先に寝ちゃうし。」

「友奈がそれでは他の者が見れる筈もないか……。」

「じゃあ今度の夏凜大将の誕生日プレゼントはキルヒアイス元帥の寝顔を撮影してプレゼントにしようかにゃ〜？」

「じゃあそうしようか。」

「棗さんが賛成するとは……本来ならプライバシー云々と反対するのに。」

「いや……風が前に見てみたいと言っていたからな。風の希望を叶えてやりたいと思っ

てな。」

2200 新無憂宮 カイザー友奈の寢室

「……。」 Z z z ……

「……友奈様、良い夢をご覧下さい。」 掛け布団をかけ寢室から退出

「しかしこのUAVは高性能だな。キルヒアイスが気付かないとは……。」

「今は亡きグリーンメルスハウゼン閣下が私に餞別として4機だけですが譲ってくださいつたのです。」

「特務情報部謹製・・・道理で4機しかない訳ね。」

キルヒアイスの寝顔を覗き隙あらば撮影しようと特別作戦班が編成された。若葉・雪花・風・棗・東郷である。ちなみに親衛隊にも話は通してあるので邪魔する者はいない。

「キルヒアイス元帥は今どこだ？」

「地下作戦室に居るようだ。友奈が怪しまれずに発信器をキルヒアイスに括り付けられたのが僥倖というものだな。」

「こんな時間に何してるのかしら？」

「・・・仕事だろう。作戦室だしな。」

新無憂宮 地下 作戦室

「……。」作戦計画を策定中

「キルヒアイス元帥は何を書いているのかしら?」

「ランテマリオ星系の攻略計画のようだ。まだ先になる作戦の計画まで立ててるのか……雪花……どうだ?」

「私から見ても手を抜いてないガチの作戦計画ですよ。ミスも無さそうですし。恒星風も戦術に見事に組み入れますから私が策定するよりよっぽど巧い計画ですよ。」

「そうか。お前も私と同意見か。」

「それはそうともう2300じゃない。いつになったら寝るのかしら?」

0025

「あ 動き出した。」

「あれこの部屋って……。」

「宮内省事務局の職員休憩室じゃない？」

「友奈の寝室の隣の部屋だな。」

「あ タンクベッドを起動したぞ。」

「……。」軍服をハンガーにかける

「……まさか。」

「……。」Zzzz… タンクベッドに入る

「「いやいやいや！」」

「仮にも帝国元帥がいつもタンクベッドで寝てるのか？」

「今日だけの可能性もある。暫く交代で観察して確認しよう。」

人員を交代しながら勇者部の面々はキルヒアスを観察していたが、結局ずっとタンクベッドなので寝顔は撮影できず、帝国元帥らしからぬ仮眠方法だったのが露呈し本来の目的から逸脱し一騒動起きてしまう。

「キルヒアイス元帥。」

「何でしょうか若葉様。」

「お前はいつも宮内省事務局職員休憩室のタンクベッドで寝ているな?」

「はい。友奈様が元帥号を与えられて以降はずっと似たような状態ですが?」

「キルヒアイスあんたちゃんと休めてんの?」

「はい。本来なら6時間は仮眠に欲しいですが軍務の傍らで友奈様を起こし朝食もつくととなると6時間確保するのは困難です。若葉様のように小まめに仮眠し身体を休めることができる程私は器用ではありません。ですから古波蔵大将に月一で整体をしていただき身体の不調を定期的に解消しタンクベッドで毎日4時間仮眠すれば6時間分以上の睡眠時間を確保できますし身体も休めることができます。」

ちなみに現実世界では原作『銀河英雄伝説』とは異なりマツサージ師だった父に頼んで定期的に身体の調子を整えていたようである。

「思ったよりストイックだったのね。なんだったら私以上に。」

「・・・友奈はそろそろキルヒアイスを労ってやれ。親友とはそういうものだし、互いに与え合ってなんぼというものだ。」

「うん、棗さんの言う通りにする。じゃあ今週一杯はバーテックスの襲来も無いから、

「ジークの実家に一回顔を見せようかな。ジークはそれで良い？」

「はい。では私は親にその旨連絡して参ります。」

バーテックスの襲来もしばらく無いとのことでカイザー友奈とジークフリード・キルヒアイス元帥は休暇を兼ねオーデインのキルヒアイスの実家に帰省することにした。

「母さん、ただいま。」

「ジークフリードおかえり！」

「お勤めご苦労様だな。」

「うん。今週一杯は休暇だからしばらくは一緒にいられるよ。それと……。」

「……お久しぶりです。」

「おお友奈ちゃんお久しぶり。元気だった？」

「はい。ジークのお陰で元気にやっていますよ！」

「そうですか良かった！ジークフリードが迷惑かけてないか心配してたんですよ！」

「いえ。むしろ私が迷惑かけっぱなしで……。」

「良いんですよもう！ジークフリードは友奈ちゃんのお世話が大好きなんですから！
ねえあなた？」

「ああそうだな。それにしてもだジークフリード。」友奈とキルヒアイスを席に着かせる
「？」

「お前いつになったら僕達に孫を抱かせてくれるんだ？」

「!?」ブフツ 黒ビールを吹き出す

「あなたいきなりすぎますよ！」 飛び散った黒ビールを拭く

「ああすまんすまん。」

「……友奈様がご結婚なされたら僕も相手を探す予定だよ。シユタインメツツ提督と同じさ。臣下が先に結婚する訳にはいかなから。」

「ううん……友奈ちゃんどうだろうか？ウチのジークフリードを拾ってやってくれんかね？」

「!?」ブフツ 今度は友奈が吹き出す

「あなた、流石にアピールが露骨過ぎますよ！」 また飛び散った黒ビールを拭く

「そうかな？友奈ちゃんとジークフリードは気心が知れてるから悪くは無いですうんだがな・・・それに真面目な話になるがね友奈ちゃん。」

「？」

「歴史上覇者の配偶者一族・・・外戚が権力を握り国政を傾けた事実は枚挙に暇がない。だがジークフリードは安心じゃないかね？友奈ちゃんの政治にはできる限り口出ししないしジークフリードの血族は僕達夫婦だけだ。外戚が権力を握るなど万が一にも有り得ないから、そこは安心というものだよ。外戚とは言ってもたかがランの栽培が好きで平民マツサージ師ごときにそんな力は無いことは明白だ。」

「父さん流石に言い過ぎだつて。友奈様を困らせないですよ。」

「だがお前この前友奈ちゃんと混浴して小さい頃のように洗いっこしてたつて『ジークなんでばらしちゃったの?!』ー！」

「いやいや友奈様に命じられたからそうしただけだつて。」

「ジーク外に言いふらさないですよ／＼。」

「友奈様申し訳ありません。私の両親は口の固さには定評がありますからつい・・・。」
「だが経緯はどうあれお前は嫁入り前の乙女の肌に触れたのだから責任はちゃんと取らなければならぬだろう？」

「それを言われると言いつ返しな・・・。」

「まあその件は一旦置くとしよう。お前と友奈ちゃんが決めることだ。とりあえずは休め。」

「はい、今日のご飯は友奈ちゃんの大好きなクネーデルのトマトソースがけと山菜うどんよー!」

「わーい♪」

カイザー友奈はまだまだ22歳、だが友情はあっても愛情が不足していた分キルヒアイスの両親の前ではただの少女に戻ってしまうのである。

「ありがとうございます。」

「どうしたの急に?」

「今更だけど親の有り難さに気付けたからさ。」

「次はお前の番だジークフリード。一度拾った命だ。亡くすなよ。一度ならず二度も友奈ちゃんからお前の戦死報告など聞きたくない。」

「うん。」

キルヒアイスの寢室

「あれ？僕のベッドってこんなに小さかったかな？」・・・友奈様、先程は両親が失礼を申しました。お許し下さい。」

「ううん。オーベルシユタインのみならずジークのお父さんにまで言われちゃったら、流石に結婚も考えないと駄目だね・・・。」

「ですが友奈様、以前若葉様が園子様を仰っていたように、無理にとは私は申しません。愛無き結婚は録な結末を迎えないものですし、無理に結城王朝を存続する必要はございません。友奈様は十分戦って来られました。多少はご自分の幸せをお考えになっても良いのです。」

「でもヴェスターラントの件は・・・。」

「軍務尚書の策謀に乗せられた友奈様にも責任はあります。ですが元はと言えば軍務尚書がどんな人物かわかっていたにもかかわらず幕僚に迎えるようお願いした私のミスです。私が断罪されるべきであり、友奈様だけに多大な責任が帰すべきでもないのです。」

「でも・・・。」

「犠牲者のことを忘れてはいけません。ですが犠牲者の為にも友奈様はくよくよせず

前に進んでください。それがせめての死者への慰めとなるでしょう。」

「うん。」

「とりあえずは休みましょう。東郷 上級大将から聞いております。私が居なくなつてから全く休んでいないと。」少々キレ気味

「うっ。」詰まる

「友奈様は働きすぎです。皇帝が働きすぎると臣下が息抜きできなくなります。これもまた無理にとは申しませんが、友奈様も息抜きができる趣味を探しましょう。ですが幅広い視野の獲得を名目にメックリンガー提督以外の諸提督方を芸術の分野に連れ回すのはあまりに不憫ですからさすがにそれはおやめになつてください。」

「うん。」

「まずは園子様から引き継いだワインから始めてみましょう。勇者部の皆様や私の両親に協力を仰ぎます。」

「うん。」

「ではピアノの用意ができましたので、友奈様は私のベッドへ。」

「ジークはどこで寝るの？」

「一階のソファで寝ます。」

「じゃあジークも一緒に寝よう。」ベッドに引き摺り込む

「!?・・・そんな、畏れ多いことです。」

「良いんだよジーク。たまには私に甘えてよ。いつつも私が甘えてばかりだから。」

「・・・ではお言葉に甘えて。」

「暖かいな〜ジークは。小さい頃一緒に寝た記憶を思い出すよ〜。」

「はい。」

「ジーク、これからもずっと一緒だよ。」抱き付く

「はい。どこまでもお供します友奈様。」抱き締め返す

キルヒアイスは満足していた。

神樹の力によって主君と再びめぐり逢い、そして多忙ながらも幸せな日々を送ることができているのである。

目の前にいる年若き主君がどのような決断をするにしても彼は従うつもりでいる。

目の前の少女を一人の女性としても主人としても大好きなキルヒアイスであるが、彼は現状以上のことを主人に求めるつもりはないのである。

今でさえ十分に幸せである以上、不必要に現状以上の幸せを求めるようなことは彼は絶対にしてない。

下手な欲は出さないうちに限るということを長く生きていた彼はよく知っているからで

ある。

判断の丸投げは正直不本意だが、自分から切り出すことはしない。

キルヒアイスはそう誓っていた。どこまでも自分の幸せ以上に主君の幸せを願うキルヒアイスであつた。

第二次キフオイザー星域会戦

「……帝国の基礎は固まった。もう十分でしょう。乃木さん、私は明後日、クーデターを起すわ。」

「いきなり何を言い出すんだ千景！」

「私はアスターテの戦いで高嶋さんを援護して私らしからぬミスをして右足左手を失った。」

もう勇者として戦えない。伊予島さんをそれなりには補佐できているけれど、それは誰にでもできる。

もう私に価値は無いわ。私は……勇者だったからこそ価値があった。価値の無い私には生きる価値は無い。

帝国内に蔓延る不平分子もまとめて私の下にいるから、私共々殺処分なさい。

高嶋さんの為に、私の死を無駄にしないで。私は別に犬死でも良いけど、どうあれ死ぬなら、高嶋さんにだけは納得してもらえる死を望むわ……高嶋さんが目を覚まさない今なら尚良い。

後は任せたわ乃木さん……いいえ、メイン・カイザー我が皇帝、後をお願いします。」
「メイン・カイザー 跪き頭を下げる

キフオイザー星域

「敵艦隊は横陣で我々の前に対峙しております。数はおよそ4万。ですがかかつてのリッテンハイム侯との戦い同様編成が無秩序です。私が800隻を率い横から奇襲します。陛下とお姉ちゃん私の奇襲の意図が読まれないよう引き付けて下さい。」

「頼むわよ樹。あんたがしくじったらおしまいなんだから。」

「任せてお姉ちゃん！」

「今！^{ファイエル}撃て！」

「雑魚ばかりだからかき氷並に容易く溶けるね。樹艦隊が通りすぎたら攻撃開始して。」

「通りすぎました！」

「よーし、^{ファイエル}撃て！」

「リッテンハイムの方がよくほど強かったわねこれは。」

「ひなちゃんの言う通り偽物だからね。弱いにこしたことはないよ部長。」

首都星オーデイン 結城元帥府

「ひなた元帥、キフオイザー星域を解放できたよ！」

「おかえりなさい友奈陛下、皆さん。先日ご説明した通り、これで神樹様がある程度力を取り戻しましたので、2人分新しい勇者を迎えることができます。早速お迎えしましょう！」

ピカッ

「はあ・・・まさか死んで尚神樹様に扱き使われるとは思わなかった・・・久しぶりだなひなた。」

「若葉ちゃん!?!」

「うわ・・・よりによって若葉大帝引いちゃった・・・。」

「もう一人は・・・?」

「・・・古波蔵棗。よろしく。」

「うわ〜大物ばっか出るわね。大帝とイゼルローン要塞初代駐留艦隊司令官を初っぱなから出すとは……。」

「では若葉ちゃんと棗さんは来週までにブラウンシユヴァイク星系とレンテンベルク星系を解放して下さい。友奈さん達はアルテナ星系、リッテンハイム星系を。まずは地道に版図を広げましょう。序盤はそこまで苦労しない筈ですから。来週またここに集合し、休息と会議を開きます。何か質問は？」

「……。」手を挙げる

「夏凜さんどうぞ。」

「上里軍務尚書に尋ねたい。どこを解放すればどの勇者が召喚されるのかは承知しておられるのか？」

「ピンポイントに誰とまではいきませんが大まかにはわかります。」

「・・・では率直にお聞きする。キルヒアイスはどこにいる？」

「[?]'」

カイザー友奈を除き、キルヒアイスをよく知っている面々は驚愕した。ジークフリード・キルヒアイズと言う名前は、カイザー友奈の地雷そのものであった。三好夏凜はそれを誰よりも心得ていた筈だ。にも関わらず何故こんなタイミングで言い出したのか。

「・・・夏凜ちゃん？」

ほら言わんこつちやない、と皆は思わずにいられなかった。さつきまで機嫌が良かったカイザー友奈の顔が般若そのものになってしまっているのだ。

「・・・完全に保証はできかねます。が、恐らくガイエスブルク要塞 或いはアスターテ星域を解放すれば召喚可能です。」

「・・・となると、アルテナ↓レンテンベルクで抜けて、ガイエスブルク要塞を攻略。それでも出なかつたら、更にイゼルローン要塞↓ティアマト↓ヴァンフリート↓ダゴン↓アスターテで攻略するか。」

「しかし三好大将、今からいきなり攻略するのは危険だ。補給線が細長く伸びきることになる。せめて帝国領全土を平定してから新領土へノイエラントへ攻略に着手すべきだ。」

「大帝殿はキルヒアイス提督の実力をご存知無いかからそのようなことが言えるのです。キルヒアイス提督は我ら幼年学校勇者科15期最強の戦士です。小官と犬吠埼姉妹が組んでかかっても返り討ちにされる程に。その上艦隊戦も負けなし。補給線を絶たれるリスクを負つても喚ぶに値する男です。」

三好夏凜はここまでジークフリード・キルヒアイスを召喚するために熱弁する自分を我ながら御しがたいと思つた。まさか自分にここまで言わせるとは・・・と思わずにはいられなかつたのだ。キルヒアイスやカイザー友奈と違い生まれた時から戦う運命にあり、そういう感情とは自分は無縁だと思つていたし、また生涯カイザー友奈一筋であつたジークフリード・キルヒアイスだが、自分自身を含め多くの者が彼に助けられ、魅せられ、愛してしまつた。カイザー友奈には及ぶべくも無いが、亡きジークフリード・キルヒアイスに会いたい気持ちは彼女とて同じことだつた。

「決を取ろう。危険を冒して大物を喚ぶか、時間がかかるが確実に活路を開くか。」

「私は夏凜さんに賛成です。戦つてみた限りではですが少なくとも帝国本土のバーテックスは勇者の加護が無い通常の艦隊でも撃破できますし、万が一補給線を寸断されても私達勇者で食い破れます。何より大帝陛下は興味がおありでないですか？史上初の男性勇者、15期最強のキルヒアイス提督を？」

「・・・興味が無い訳ではない。一度手合わせしてみたいものだ。」

「・・・私も戦ってみたい。」

「棗もか。」

「・・・。」無言で握手

「何よこの戦闘狂共。」

「そう言いながら風も反対しないじゃない。」

「もう過半数が賛成してるのに私だけ反対しても意味無いじゃない！」

「あんたもキルヒアイスが好きだった癖に。」

「夏凜ちゃん？」般若と化したカイザー友奈

「ひっ!?冗談よ冗談!もうそんなにカッカしないの!」

カイザー友奈のキルヒアイスの独占欲も半端ではない。当人が死んで尚これである。キルヒアイスの生前はどうだったかなど推して知るべしである。

「では賛成多数でキルヒアイス提督を優先的に召喚しましょう。棗さんが犬吠埼大将と入れ替わりでアルテナ星系解放に戦力を集中します。前線に行かない組はしばらく首都星オーデインで休息です。」

1800

軍務省 士官用バー

〃海鷲へゼー・アドラー〃

所変わって海鷲では二人きりの貸し切り状態で奇妙な宴が始まっていた。乃木王朝初代皇帝である若葉大帝と結城王朝初代皇帝（現在の皇帝）たるカイザー友奈の酒を介した会談である。

「Prosit . . .」杯を交わす

「で、私に聞きたいことがあるそうだな。ついでにひなたからも聞いている。150年も経ち新しい王朝の下では私の悪行ばかりがクローズアップされると。私自身にのみ帰する悪行ならば何も言わんし、私に言う資格等無い。だが我が友ファルストロングやひなたの苦勞を侮辱することだけは許さん。」

「それについてはリヒター君やブラツケ君の仕事だよ。私は歴史はあんまり得意じゃなかったし、歴史に基づく作戦立案が必要な時は得意な人に任せてたから。それにいざ皇帝になってみるとわかったこともある。なってみないと分からない苦労もあるというのがよくわかったから私も多くは聞かないけど・・・私はただ一つだけ聞きたいの。」

「なんだ？」

「あなたも私のように何か大切なものを失った？」

「・・・ああ。ファルストロングを筆頭に本当に守りたい仲間をことごとく失った。後悔は無い。だが反省すべき点は多かった。卿のような過去を反省できる傑出した人物に禅譲した子孫の人を見る眼に感謝している。私には過ぎた子孫だよ。」

「園ちゃんはまだ来てないけど、近いうちにこつちに来る。その時に褒めてあげたら喜ぶと思うよ。」

「・・・ああ。そうさせて貰おう。」

「・・・思ったより穩健に終わったみたいね。良かったわ。」

「カイザー友奈陛下も皇帝になってみて若葉ちゃんの苦勞を知って貰えたことが大きかったですね。」

「では我々は退散しよう。」

自分との戦い

惑星 ヴァンフリート 4―2

「さーてキルヒアイス元帥、あなたにも自分自身と戦ってもらおう。頑張つてね。」

「赤嶺上級大将！どういうつもりだ！もう我々に精神攻撃が通じないのはわかっただろう！」

「いやいやいや。若葉大帝陛下。貴女方乃木王朝黎明期組への精神攻撃なんて所詮前菜ではないんですよ。本命はキルヒアイス元帥ですから。」

「・・・若葉様、手出しは無用です。さあ来い偽物！」

「さあ皆さんこちらのモニターをご覧くださいな。」

「[?」」

「このモニターにはキルヒアイス元帥の精神世界が映し出されている。キルヒアイス元帥が皆に隠しだてしてすることもわかるかもしれないね。んじや私はさらば」フラツ シュバンを投げる

バン

「くそ！逃がしたか！それよりこのモニターどうするんだ？」

「そうですね・・・ひとまず覗いて見ましょう。」

「キルヒアイス元帥が隠していること・・・気になる。」

キルヒアイスの精神世界

キルヒアイス「ここが・・・僕の精神世界。」

キルヒアイス・霊「その通り。僕はお前の合わせ鏡。問おう、ジークフリード・キルヒアイス。」

「？」

「僕はお前の精神の中にいる。お前が体験した記憶を映画のように眺めることができ
る……前世の記憶も例外ではない。見える見える……。」

「……。」

「前世のことはともかくとして、幼年学校を卒業する際、在学中3年間全てお前自身が首
席でありお前の主人はその次の成績だった。にも関わらずお前に何か瑕疵があったわ
けではないにもかかわらず結城友奈が幼年学校首席として卒業し友奈は少佐に任官す
るがお前は中尉として任官しキャリアのスタートから後れを取った。」

「……。」

「皇帝からの覚えもよく強烈なカリスマを持っていた結城友奈に比してお前は器用貧乏
なだけでカリスマらしいカリスマもなかった。そんな自分の主人に対して妬みの感情
を抱いたのではないのか？劣等感を抱いていたのではないのか？」

「何を言う！友奈様がすごい……ただそれだけのことだ！」

「お前の実力は高い。バーミリオン会戦でお前の主人は一人で天の神を倒すことはでき
なかった。他の勇者や優秀な将帥達の協力があって尚、ひどく苦勞して倒すことができ

た。だがお前ならそこまで酷くはならなかっただろう。お前は結城友奈と違って負けない戦いができる将だからな。そんな不甲斐ない少女を主人と仰ぎその下に甘んじているのはどうかと思うがね。」

「僕は前世つまらない小役人を半世紀近く勤めた後、見守ってくれる者もなく孤独死した。何の因果か二度目の人生が与えられ困惑してしまっただが、そんな困惑していた僕に光を与えてくれたのが友奈様だ。小役人をやっていき僕は心の底からついてきたいと思えるような上司についていざめぐり合うことができなかつた。そんな自分で輝くことができなかつた僕を明るく照らしてくれた太陽が友奈様だったんだ！この方だけだつたらずつとついていける。僕の勤がそう告げていた！だから今までも、そしてこれからもついていくんだ！この言葉に偽りは無い！」

「……思っていた以上に揺るぎ無い愛があつたか……。」

「おお・・・？くすんだキルヒアイスが消えた！」

「勝った！流石はキルヒアイス元帥！」

「・・・何とか戻ってくれました。友奈様、皆様、ご迷惑をおかけしました。」

「大丈夫だよ。自分の半身を信じないのは『家族』失格だもん。ジーク、お帰り！」手を差し出す

「ただいま帰りました友奈様。」握手

「キルヒアイス元帥、お前の問答をそのモニターで聞いていたが、『前世』という単語が気になった。あれはどういう意味だ？」

「古波蔵大将、私には友奈様にすらお話ししたことがなかった秘密があります。私はキルヒアイス家に生を受ける前、私の中にある魂には、西暦の時代の地球で小役人として生き80年程過ごした記憶があるのです。」

「・・・なんだそうだったのか。合点がいった。私やひなたの方がお前よりも年上であるにも関わらず、お前と話しているとどうにも年上と話をしているように感じていたのはそういうことだったんだなキルヒアイス元帥。」

「その時代はどんな時代だったんですかキルヒアイス元帥？」

「伊予島元帥、その時代はとても平和でした。少なくとも私は戦争を目にすることなく平穩に生涯を終えることができました。ですが・・・。」

「「？」」

「良き友も無く、良き上司や部下も無く一人ぼっちで死んだのです。孤独に苛まれながら死んだ私です。この時代に改めて生まれた以上一人ぼっちは嫌だった。そんな時友奈様に出会いました。友奈様という恒星に魅せられた私は思いました『この方にどこまでもついていこう』と。その日から10年余り。微力ながら友奈様の覇道に貢献して参りました。」

「そういうことだったのね。メルカツツ提督は友奈のこと『強いが脆い』って評してたし、あんたが死んだ時の友奈の発狂を聞いてその通りだったと思ってたけど、事實は異なっていたよね。」

「その通りです犬吠埼上級大将。私も友奈様に依存しています。わかつてはいたので。ですが、衛星は主たる惑星から離れることはできません。」

「……この共依存に我々は口出しできん。二人の問題だ。わかっているな風?」

「そうね。私達は手出し無用。それにもうキルヒアイスを暗殺する奴なんて居ないだろうしこの問題は勇者部部長権限で保留とします。異議は認めないわよ。」

「了解。」

「全く……ある意味一番えげつない攻撃だったな。だが皆弾き返した。我々の結束が強化されただけに過ぎん。」

「そうだね。先祖様。よかつた。わっしーもキルヒアイス元帥も無事で!」

「任務完了、前線基地に戻るか。お腹ペコペコだ。キルヒアイス元帥、今日の献立は?」

「今日の献立は鶏肉のフリカッセと松茸のお吸い物、海藻サラダです。三ノ輪 上級大將。」

「楽しみだ。フリカッセ。キルヒアイス元帥の飯は美味いからな。」

ヴァンフリート 4—2 前線基地 食堂

「しかし、完全無欠と園子の世代において讃えられたキルヒアイス元帥に弱点があったとはな。」

「・・・いいや若葉。私はむしろ安心してゐる。」泡盛を呷る

「？」

「得てしてただ硬い武器というものは脆いものだ。我々と違い特に守るものが無かった中で戦い続けた雪花の末路を我々は見てゐるんだぞ。」

「・・・そうだったな。」

「元々雪花はトーク力はあるがそれに隠れて陰にこもるタイプだったからな。我らと違い帝国全体を俯瞰していたお前やひなたが見抜けなかったのも無理からぬことだが。」

「・・・。」ラムを呷る

「守らねばならない弱点は敵に露見すれば厄介だが、露見しない限りはそれを守る為に必死になる。却って強くなれることもある。キルヒアイス元帥と結城の絆がまさに

そうだった。」

「赤嶺上級大将はそこまで読んで我々に計略を仕掛けたのか・・・？」

「そもそもそれだけとは思えない。生前の彼女は我々黎明期組が死に絶えた凡そ20年後に現れバーテックスに二重三重に罠を仕掛け武勲を立てた我々には無い“謀将”だった。まだ罠が仕掛けられているのは間違いない。今までのように一筋縄ではないぞ。」泡盛を置く

「ああ。お前が赤嶺上級大将の立場だったら何を目的に今回我々に襲撃をかけた？」

「・・・ランテマリオ恒星系に戦力を集結させる時間稼ぎだな。あそこなら守るに易く攻めるには難しい。我々が一挙にハイネセンを突こうとすれば背後に食いつける上、我々に一軍を持って奴らを抑え込み本隊がハイネセンの造反神を討つだけの戦力は、残念ながら無いのだ。陳腐で平凡な謀略だが造反神の戦力が不足している・・・が我々には10万隻も無い以上戦略レベルの罠ならこれが精一杯だ。」

「そうだな。それ以外考えられん。」

翌日　ブリュンヒルト　大会議室

「・・・以上のことから、奴らはランテマリオ恒星系に戦力を集結させている可能性がある。強行偵察艦を派遣し、早急に調査すべきだろう。」

「確かに棗さんの言う通りだね。ジーク。」

「畏まりました。手配致します。」会議室を退出する

「他の皆は何かある？・・・無いなら解散。休養して次に備えてね。」

「了解！」殆どが退出する

勇者の殆どが退出した中で、東郷上級大将と三好大将だけは席を立たなかった。二人とも腕を組み、何か言いたげな顔で友奈を見ている。

「二人ともどうしたの？」

「あんた何か隠してるでしょ？」

「キルヒアイス元帥は何も言わないから、友奈ちゃんに直接聞こうと思ったの。」

「・・・」

「何を隠してるの、あんた？」

「これから話すことは誰にも漏らさないでね。」

「……」頷く

「私の魂の輝きは標準的な勇者の凡そ20倍。だから多少の無茶は通る。でも流石に死者を甦らせるにはかなりパワーが必要な上無条件にとはいかなかった。現実世界にジークと銀ちゃんを甦らせるのかなりパワーを使っちゃったし……。」

「条件って何?」

「私の魂の一部を使って銀ちゃんもジークも甦らせる約束を大神オーデインと交わしたけど……私が現実世界で死んだら、銀ちゃんもジークも死んじゃう。死者の魂は死んで年月を経る程摩耗する。摩耗した分を私の魂がカバーしたけど……その結果ほぼ全部私の魂になっちゃったから、ほぼ私と同化しちゃう。つまりジークか銀ちゃんが死んでも私は生き続ける。でも私が死んだら……。」

「……二人は承知してるんでしょね?」

「うん。流石にこんな大事なことは言わない訳にはいかないから。」

「……この雰囲気の中だからついでに聞くけど、バーミリオン会戦以降あんたの体調は悪くなるばかり。それについては何か隠してない?」

「それは私の身体の問題じゃないと思うよ。おそらく私自身の性サガの問題だから。」

「性?」

「東郷さんは薄々気付いてるでしょ？言わない・・・いや、認めたくないだけで。」

「・・・友奈ちゃんは、戦うのが大好きなのはわかっていたわ。でも呑んだくれた私をキルヒアイス元帥と一緒に暖かい手で救ってくれた友奈ちゃんを私はバミリアンの時まで信じてた・・・でも・・・。」俯く

「そう。私は戦うのが大好きなんだよ。東郷さんの言う優しさなんてジークの影響で得た後天的な要素に過ぎない。強大な敵を求め、戦い、勝つ。それが私。だからバミリアンではいつも以上に前に出て戦ったし、オスカー君との戦いもミッター君に丸投げしなかった。それにラグナロック作戦初頭あたりでお母様が夢に出てきてこう言ったの。「命を燃やし悔いの無いように生きろ」って。まあ言われなくても私はそう生きてたよ。私は燃え尽きることもよりも望みを果たせずに燻り続ける方がよっぽど怖かったから。現実世界でジークが死んじやった後はずっとそう生きてきた。もう失うものが無かったから、何も考えずに走ってきた・・・。」

「・・・。」

「いわば流血と戦いは私を生かす燃料だったんだよ。ジークとて間違いなくその事実に関わっている。でもそんな野蛮残酷極まりない私にジークは文句一つ言わずずっとついてきてくれた。ジークが私の信頼と期待に応え続けてくれた以上私もジークの努力と忠義に報いる為に戦わないと駄目なんだよ。今更止まるなんてできない。ついてきて

くれる皆には申し訳ないけど……。」

「……あんたの船、ブリュンヒルトは見る者を圧倒する美しさがある。あんたの強さと高貴さの象徴としてあんた共々兵士達からは崇拜されてるけど、肝心のあんたの手は真つ赤も良いところ。私が言えたもんじゃないけど……。」

「……私は、それでも友奈ちゃんについていくわ。キルヒアイスが死して尚友奈ちゃんを守り続けたように。夏凜ちゃんは？」

「……はあ。今更うじうじしても仕方ないわね。やってやるわよ！今まで通り！でもね友奈、一つ忘れないで。」

「？」

「死者の為に生きちや駄目よ。キルヒアイスもそんなこと望んでないし、あんたのお母様も間違いなくそう思ってる。血を流すのは……この際仕方ないにしても、あんたはあんた自身の為に生きて。」

「……うん。肝に銘じておく。」

V 回天の章

違う世界へ

新帝国暦4年11月15日 新帝国首都星フェザーン ミッターマイヤー邸

2300

久しぶりに仕事を早めに切り上げ妻と仲睦まじく寝室で寝ていたミッターマイヤーだったが、久しぶりに夢にロイエンタールの幽霊が出てきた。宇宙暦210年物の白で乾杯していた二人だったが、ロイエンタールが唐突にカイザー友奈のサガについて語り始めた。

「ミッターマイヤー、俺は思うのだ。戦いとは、俺達が仕えるピンク髪の覇者、我らがカイザー友奈陛下という英雄を生かし輝かせる栄養剤のようなものなのだったのではないのか?・・・とな。その戦いは最早終わった。もうカイザーに栄養剤が供給されることは無い。暫くは貯蓄があるだろうから大丈夫だろうが、それが無くなったら・・・どうなるだろうか。現に陛下の最後の戦いであつたバーミリオン会戦の直後陛下はお倒れになり原因不明の高熱で一週間生死の境を彷徨いあそばされた。その後も体調はお

悪くなるばかり。キルヒアイスが俺がいるヴァルハラからそっちに戻ってから少なからず持ち直したが、最近はまだお悪くなっておられるのが現状だ。それだけが気掛かりでな。」

「ああ。卿の言う通りかもしれない。陛下付軍医団の連中が老衰に近い衰え方で、薬の処方のように無いとぼやいていたとメックリンガーから報告を受けている。取れる選択肢は臓器入れ替えや寒中生活をしていただく位だがどちらも陛下の玉体に負担が大きくその上効果があるかわからないのだそうだ。」

「いかな。このままだとオーベルシュタインあたりが結城王朝存続の為に陛下に勝手に夫を付けるなどという暴挙をしかねんぞ。」

「陛下もキルヒアイスに対して素直になつて下されれば・・・な。」

「そうだな、俺もそう思う。キルヒアイスもキルヒアイスだ。男なら自分から言い出して貰いたいものだ。」

「まあそう言つてやるな。キルヒアイスにもキルヒアイスなりの考えがあるのだろう。」

「まあいきなり卿に子供を押し付けた俺も、奥方への求婚があまり格好のつくものではなかつた卿も、キルヒアイスに説教する資格などありませんがな。」

「まあな。」

翌日

フエザーン 新軍務省 地下作戦室

「ウルヴァシーに駐留するシュタインメッツから報告が届いた。先日2255、ウルヴァシー上空を哨戒活動中だった部隊がトンネルのようなものの出現を観測したとのことだ。ブラックホールのような見た目をしているが、引力は無くトンネルの一種ではないかと推測できる。直径30000km程で、現在シュタインメッツが直々に入口近辺を警戒している。」

「もしトンネルなら、どこかに繋がっているよう。問題はどこなのか・・・だな。」

「然り。一応シュタインメッツに調査させるべきだろう。」

「・・・この穴の調査は余がジークと直接調査する。」

「「!?!」」

「陛下?」

軍幹部達は一様に驚いた。確かにフェザンとウルヴァシーは比較的近く、新領土とフェザンを繋ぐ要所である。そのウルヴァシーに出口不明のワームホールが発生した以上上級大將複数名かミッターマイヤーが直接調査しても釣り合う案件である。だが皇帝直々に赴く程のものかといえばそれは違う。それはカイザー友奈はもとよりキルヒアイスも東郷もわかっている筈。だがキルヒアイスも東郷も止めようとしめない。その異様さに諸提督達は浮き足立つのも無理からぬことであつた。

「陛下、あえて申し上げます。確かに直ちに上級大將以上の幹部が調査すべき重要な案件ではありますが、態々玉体をお運びになられるには及びませぬ。ミッターマイヤー元帥にお任せになり、陛下はフェザンから調査する将兵達に叱咤激励あそばされれば十分かと。」

「シュトライト君、ありがとう。でも勘だけどそのトンネルの先に余が求めて止まない『何か』がある気がするんだ。止めないで。」

「・・・御意。」

「余がブリュンヒルトで直接調査するにあたりカール君は余が着くまではトンネルを警戒すること命じる。ただし内部調査はメック君の艦隊に命じる。余はメック君の進路啓発についていくこととする。メック君、頼むね。」

「御意。」敬礼

新帝国暦4年12月1日、カイザー友奈はおよそ半年振りにフェザーンを離れ、メツクリンガーのクヴァシルにエスコートされる形でウルヴァシーに向け出発した。この調査、もとい冒険が何を齎すのか。カイザー友奈に何を与えることになるのか。現時点でカイザー以外にそれを知っているのは巫女達と東郷、キルヒアイスのみであった。

美姫へブリュンヒルトは血を欲す

メックリンガー艦隊に護衛されウルヴァシーに到着したブリュンヒルト。愛艦から降り立ったカイザー友奈は、警戒していたシユタインメッツから報告を受けた。

「陛下、今回発生したワームホールですが現時点で如何なる物体の出現も未だ確認しておりません。ですが一つわかったことがあります。」

「何がわかったの？」

「はっ。観測班曰くこのワームホールの向こう側出口そのもの或いはすぐ傍に弱いながらも恒星があるのではないかとのこと。少なくとも奥行きは30000km程のようですが、出口地点で150℃でした。その上微弱ながら恒星らしき光源反応も感知しております。」

「なるほど。じゃあ念のため防御の弱いミサイル艦・砲艦・駆逐艦、居てもあんまり意味が無い空母も置いていこう。標準型戦艦、高速戦艦、クヴァシル、ブリュンヒルトだけで奥を調査する。それで良いねメック君？」

「承知しました。標準型戦艦・高速戦艦のみ、6500隻で陛下をお守りします。」

「東郷さんの預言曰く向こうに有人惑星があるらしいけど、文明は西暦レベルらしいか

ら、積極的に征服したりはしないにしても、ナメられないように最低限数が必要けど……
6500隻もあれば十分だよ、ジーク？」

「はい。更に申し上げるなら、向こう側が領有する惑星？は一つしかありません。友誼を結ぶにしても友奈様が直々に赴かれる必要はありません。銀河帝国は星間国家なのです。副帝たる私にお任せ下さいませよう。」

「わかった。」

「では臣は陛下から御下命あるか、メックリンガー提督から要請があり次第即応できるよう待機しております。」

「ありがとうカール君。でもずつと待たせると兵達が可哀想だから20時間経ってメック君か余が何も言って来なかったら警戒配置にして良いからね。」

「はっ。」

新帝国暦4年12月18日、メックリンガー艦隊に守られながら、カイザー友奈はブリュンヒルト、再就役が間に合い追い付いてくるキルヒアイスのバルバロッサ、ミサイル搬入中トラブルが発生し、多少手間どいながらも何とか追い付こうとする東郷の長門

の到着を待たずしてワームホールの奥へと出発した。

戦艦　クヴァシル　艦橋

「ここ　これは?!」

「どうした?」

「はっ! 先行したシユトラウス中将より打電! 『我敵ト交戦ス。星屑ノミデ撃破ハ容易ナレドモ数ハ数エキヌ程ナリ!』」

「何!? プリユンヒルトに通信回線を開け。」

「陛下、御報告致します。」 敬礼

「何かわかった?」 答礼

「先行させたシユトラウスがバーテックスを発見、星屑しかおらず何とか戦えておりますが、数があまりに多くこのままでは打ち崩されます。」

「・・・じゃあ久しぶりに余とジークと東郷さんが出るよ。」

「陛下。」

「言いたいことはわかってる。心配してくれてありがとうメック君。でも大丈夫。ワー

ムホールに入ってから身体の調子が良くなってきたんだよ。余は久しぶりに戦いたかったんだ。それに今の余にはバーミリオンの時と違って……。」キルヒアイスと東郷の肩を叩く

「承知しました。そこまでおつしやられるなら、臣としても何も言いますまい。副帝陛下、東郷上級大将、陛下を宜しく頼む。」

「はい。友奈様は私が守ります。安心して下さいメックリングー提督。」

「右に同じく。任されました。」

「ザイドリッツ君、ブリュンヒルトを前へ。シュトラウス中將を余とジーク、東郷さんで直接援護する。余の帰る家は任せるよ。」

「御意！」

シウトラウス分艦隊 旗艦 ケルンテン

「醜態を見せるな！整然と、正確に撃ち返せ！間も無く陛下が直接来援に来て下さる！打ち崩されるなよ！」

「「応 !!」」

「しかし陛下の玉体がお悪いのは私ですら周知のこと・・・大丈夫だろうか・・・。」
「ブリュンヒルトが来ました！陛下が副帝陛下、東郷上級大将と共にこちらに！」

「来たか・・・勇者が前に出るとなまじ砲撃できなくなる。陛下が前線にお出になる前になるべく討ち減らして陛下のご負担を軽くする。急げ！」

「「はっ！」」

「しかしなんなのだこころは・・・まるでクラインゲルトの観光名所“黄色い樹海”ではな

いか。我々は宇宙にいた筈なのに・・・。」

「友奈様、間も無く出口です。」

「うん。東郷さん、久しぶりの実戦だけど、大丈夫？」

「勿論！友奈ちゃんとかイルヒアイスの為に退役してからも私はずっと鍛えてたんだから！」

「ありがとう。じゃあ行こう！」

「星屑ばかりで御霊持ちがいまませんね。まあ楽ですから構いませんが。」ザシユ

「キルヒアイス元帥、あまり暴れないで！私の仕事が無くなっちゃうわ！」ズギユン

「失礼しました東郷上級大将・・・友奈様。」

「・・・ジークも気付いた？」

「はい。この戦場自体から私達と同じ匂いがします。」

「でもここには私達3人以外の勇者がいる筈無い・・・どういうこと？」

「・・・園子様のお好きな異世界物小説のような現象ではないでしょうか？バーミリオン会戦で友奈様は天の神を倒しました。つまりもう帝国のどこにもバーテックスはいな

い筈なのです。ですが私達は現に交戦しているのですから。（原作『ゆゆゆ』の樹海にそっくりなのがどうも気になる・・・）」

「とりあえず周辺の掃討は完了したわ友奈ちゃん。」

「ありがとう東郷さん。帰投しよう・・・これは？」樹海化が少しずつ解除されていく「友奈様、調査は次の機会に。敵と戦いお身体の本調子が戻ってきたのです。これ以上は、些か欲が深いというものです。メックリンガー提督達にこれ以上心配をかけてはなりません。」

「わかった。」

メックリンガーの判断によりシユタインメツもメックリンガーの部隊に合流し、現在カイザー友奈、キルヒアイス、東郷の3名もシユタインメツの旗艦フォンケルに集

まり会議を開いていた。

「陛下、わざわざご足労いただきありがとうございます。ご返事ありがとうございます。」敬礼

「うん。心配かけてごめんね。」答礼

「いえ。それより陛下が戦闘中、我らは周囲を警戒しつつ調査してはいたのですがわかったことがございます。どうやらこの世界は銀河・惑星という単位が存在せず一定の可住領域が存在しそれ以外は高熱高温のため人間が住めない地域になってしまっているようです。現在艦隊が駐留しているこの周辺一帯も例外ではありません。」

「その可住領域は？」

「艦隊の前方11時方向、距離150000の場所に。面積はおよそ190000平方キロ。惑星ヴィスマールにある陛下の別荘とおよそ同規模です。」

「バルバロッサと長門は？」

「はい。後2時間で我が艦隊と合流できます。」

「友奈様、これは緊急事態に準ずるものであると私は考えます。現在予備役になっている勇者達に召集命令を。それと黒色槍騎兵艦隊をこちらに呼ぶべきかと。」

「うん。カール君、ジークの言う通りに。」

「御意。それともう一つ。これはその可住領域を向こう側の索敵範囲外から撮影した強行偵察艦からの画像です。」写真を見せる

「これは・・・友奈ちゃん?!」

「こっちは三好大将?」

「あれ、樹ちゃんまで・・・予備役入りした時に勇者変身端末は余に預けたからもう変身できない筈なのに・・・。」

「些か荒唐無稽な話と言われても仕方ありませんが、ここは並行世界なのかもしれません。そうでなければここまで陛下や三好大将、犬吠埼予備役大将に似ている人物がしかも勇者の姿で可住領域外にいるなどありえないではありませんか。」

「その通り。ここまでそっくりさんがいるとなるともしかしたら犬吠埼予備役上級大将や防人連隊の面々もいるかもしれませんね。」

「臣もシユタインメツツ提督と副帝陛下のご意見と同じです。ワームホールの先にバーテックスが存在するとわかった以上軍としても我が方の側の出口のみから入ってくる敵を迎撃するというのでは効率が悪くなります。あちら側にも艦隊を配置するとしてこちら側からも叩いておくに越したことはないわけですから、その可住領域の自治体と交渉し艦隊が駐留する拠点を獲得すべきです。艦隊の駐留拠点の為の土地を貸してもらい代わりに共同戦線を張るということにすれば向こう側も納得してくれることでしょう。」

「うん。メック君の言う通りだね。そうしようか。ジーク、頼んで良い?」

「お任せ下さい、友奈様。メックリンガー提督、同行していただけますか？」
「承知した。」

「向こう側出口の警備は黒色槍騎兵艦隊にやらせよう。フリッツ君がかなり退屈そうにしてたからね。」

「そうですね。最近ビットェンフェルトは退屈しのぎに部下達と共に筋トレを始めたようなのですが、ミュラーが巻き添えを食ったようですからな。ミュラーに休暇を与える為にもそれが宜しいと存じます。」

四国上空

『告げる。こちらは銀河帝国軍です。私は副帝 兼 帝国軍統帥本部総長ジークフリード・キルヒアイス元帥。四国領域の自治体との会談を要求する。最高指導者と勇者は、直ちに出現して下さい。5時間の猶予を与えます。』スピーカー音声

「これで良かったでしょうか？」

「できることはしました。後は待ちましょう。」

VI 風雲の章

番外編 皇太子手記

新帝国暦11年 12月25日

新帝国暦6年12月25日、5年前の今日、精霊降臨祭の日でした。その日の深夜、私は生を受けました。結城王朝銀河帝国初代皇帝 友奈1世の娘として。それからちょうど5年が経ち、私は母上から日記を与えられました。今日からつけていこうと思います。

新帝国暦11年12月26日

本日は母上の大親友であり「副帝」でもあるキルヒアイス元帥が来て下さいました。明日私とフェリックスと美子に統帥本部のお仕事を見せて下さるそうです。楽しみですだな。

新帝国暦12年12月25日

私の6歳の誕生日です。フェリックスも9歳になりました。美子も後1週間で6歳になります。母上から誕生日に際し欲しいものを聞かれました。私は以前からミッターマイヤー元帥とフェリックスの仲の良さを間近に見てきましたから、『父が欲しいです』と正直に申し上げました。するといつも私には笑顔しか見せない母上が、らしくもなく険しい顔になりました。しばらくして『明日我が友の下に行つて相談してみて。』と言われました。だいたい察しました。

新帝国暦12年12月26日

新帝国首都星 フェザーン 皇宮 獅子の泉ヘルヴエン・ブルン 外苑 キル

ヒアイス邸

「殿下、ようこそいらつしやいました。」

「キルヒアイス元帥、ここには私と貴方しかいませんよ?」

「・・・失礼しました歩実へゆみ様。本日は何用でお越しになられたのですか?」

「母上に誕生日プレゼントは何が良いか聞かれました。私は父が欲しいと申し上げます

たが・・・即答はせず、キルヒアイス元帥に相談と言われやって来た次第なのです。」
「歩実様は・・・未だ認知もせず顔も見せないお父君にどのような感情を抱いておいでですか？」

「フェリックスとミッターマイヤー元帥の仲を見てきた立場としては正直ちよつと複雑です。ですが・・・少なくとも母上を20年以上守り抜き、親友としても女性としても愛していた一途な貴方を私は悪く言うつもりはありませんよキルヒアイス元帥。」

「・・・。」

「私の右目は母上譲りの紅い目ですが、左目はアメジストのような紫です。母上の周りの男性で紫の瞳を持つのは貴方だけです。それに母上が誰かと契りを結び世継ぎを産むなら、貴方の種以外ありえませんが。事ここに及んで私が聞きたいのは一つだけです。キルヒアイス元帥、何故母上と結婚なさらなかったのですか？」

「・・・私は確かに友奈様を親友としても女性としても愛しておりました。ですが同時に結婚して私の方が宇宙を羽ばたいていくに際し重しになることは避けたかったです。」

「それは言い訳に過ぎないでしょう。母上は宇宙を手に入れました。羽ばたくも何も無い。今の母上は貴方が傍にいてくれればそれで十分だと感じています。私如きにわかるのです。盟友たる貴方にわからない筈が無い。」

「……あまりこのような物言いはしたくはありませんが、意見の相違があったこと、友奈様に対して責任を取らなかつた私の不手際でした。そう納得していただけませんか？」

「それで私が納得できる筈も無いでしょう！」

「!？」

「フェリックスがミッターマイヤー元帥にして貰っていたように、私も大きくて、優しい手で撫でて欲しかつた！厳しく躡て欲しかつた！肩車して欲しかつた！それなのに……。」

「……。」 歩美を抱き締める

「本当に申し訳ありませんでした歩実様。事の真相はこうなのです。友奈様は友奈様で私をこれ以上自分に付き合わせるのを嫌い、私も私で友奈様に判断を丸投げしてしまいました。その結果歩実様に多大な御迷惑をお掛けしてしまったのです。男としての甲斐性が無かつた私の罪であることは紛れもない事実なのです。友奈様は何も悪くありません。お許し下さい。」

「……母上と貴方の仲と、判断に私は口を挟めません。でも……許して欲しいなら、今週一杯位は“父”になつて下さい。母上には『しばらく帰らない』と連絡しますから。」

「・・・わかりました。」

キルヒアイス元帥・・・今週だけは「父上」と呼ばせて貰いますが、父上は帝都防衛総隊の将官級幹部の皆さんや東郷上級大将以下母上の同級生の皆さんと同居しています。

「国土准将。お久しぶりです。」

「殿下、お久しぶりです！」 跪く

「そんなに大袈裟にしないで下さい。母上に跪くならいざ知らず、私は未だ何ら実績の無い身なのですから。」

「失礼しました。」 立ち上がる

「国土准将、今日はここに泊まらせていただきます。キルヒアイス元帥から許可は得ました。」

「わかりました。お部屋はどこになさいますか？」

「キルヒアイス元帥の部屋で大丈夫です。許可は得ています。」

「わかりました。何かありましたら私にお申し付け下さい。」

「ありがとうございます。」

よくよく考えてみると父上の家は副帝の家にしてはとても小さい。獅子の泉（ヘル）ヴェン・ブルン（外苑）とはいえ警備兵2個小隊が外側に駐留しているけど、それだけなのです。執事やメイドの一人もいません。以前弥勒少将から聞いた話によると父上か、同居している国土准将、犬吠埼上級大将、父上の御両親が持ち回りで家事をしているそうです・・・と噂をしていたら東郷上級大将と美子、父上の御両親が買い物から帰ってきました。

「あら歩実ちゃん、いらっしやい。」

「歩実様。」

「キルヒアイス元帥から通達があつたと思いますが、今週一杯お世話になります。」

「どうぞどうぞ。ゆっくりしていつて下さい。何でしたら『お祖父ちゃん』と呼んでいただいても結構ですから！」

「あなた！露骨過ぎますよ！殿下にも立場というものがあるんですから！」

「ああすまんすまん。」 苦笑い

「お祖母様、今日は何にしましょうか？」

「今日は寒いですからね。じゃあとろ玉うどんにしましょう！」

「そうですねお義母様。添え物のかしわ天とかき揚げは私が作りましょう。」

「お願いしますね美森さん♪」

「はっ♪」

父上の母君と東郷上級大将のコンペネーションと料理の腕は健在のようですね。私も母上も料理は粗野な者でもできるもの以外壊滅的ですから、少し羨ましいです。その点美子も母親である東郷上級大将譲りですから、ちよつと嫉妬してしまいます。

「「ただいま帰りました。」」

「「おかえりなさいー！」」

父上、犬吠埼上級大将、三好大将、楠中将、弥勒少将、加賀城少将、山伏少将が帰ってきました。20年近く共に戦ってきた戦友なだけあつて和氣藹々とした雰囲気での帰宅です。正直こんなに沢山友がいる父上が羨ましいです・・・単なる“戦友”にしては距離が親密なのは私が僻み過ぎだと思いたいです。

立場が立場とはいえ私には美子とフェリックスしか友がいないですから。士官学校に入つて友ができたならなと思います。

「美子、相談があります。」

「何ででしょうか実様？」

「料理を教えてください。このままではフェリックスやビッテンフェルト提督に笑われて

「まいります。」

「わかりました。陛下からお許しを得次第レッスンをしましょう。お母様、バックアツプお願いします。」

「任せて！」

2230 キルヒアイスの寝室

「父上、今日もお疲れ様でした。」

「ありがとうございます。」

「で、父上には以前からお聞きしたいことがあったのですが宜しいでしょうか？」

「何でしょうか？」

「父上には一体何人の“女”がおられるのですか？」

「・・・幼年学校勇者科15期全員と園子様、三ノ輪上級大将です。友奈様からは『真剣に愛されているなら無碍にはするな。ただし漏れなく申告すること』と仰せつかっております。私も真剣に愛されたら拒否するにできませんから・・・。」

父上はとても優秀な軍人であるし、母上を良く支えて下さっている副帝です。ですが優しすぎます。同期の皆さんもそれを知っていたからこそ母上という普段は優しいが怒らせたら本当にまづい存在がありながら父上に攻勢をかけたのでしょう。父上の同級生達は皆ことごとく戦場で父上に救われていますし、元々同期としての絆も深かったです。『吊り橋効果』もあるでしょうが、結果的に父上の愛人の数は膨れ上がりいつも笑顔絶やさない母上もその件に関してだけは決して良い顔をされませんでした。同期とはいえ他の女に父上との時間を奪われたようなものですか。

「三好大将もお腹が膨らんできましたからね。楽しみです。新しい妹か弟が生まれるんですから。」皮肉る

「・・・。」押し黙る

流石に父上をいじめ過ぎましたね。

「父上。」キルヒアイスを抱き枕にする

「歩実様、私が父で良かったですか？」頭を撫でる

「はい。」

「ありがとうございます。私も友奈様と歩実様にお仕えし皆さんと共にあれて幸せです。」

「後は前に出過ぎないようにしていただければ言うこと無しなのですけど・・・聞き入れてはいただけませんよね・・・。」

「私は友奈様の最後の盾です。残念ながらそればかりはお許しいただきたいのです。」

「ちよつとハラハラしますけど、それは母上が決めることです。それに私はいつか父上を守る立場になって見せますから問題はありません！」胸をはる

「私としてはあまり前に出て欲しくは無いのですが・・・それが歩実様の御意なら私から申し上げることはありません。歩実様のご思慮のままに事をお進め下さい。」

「はい。」

思い立ったら吉日。明日からでも勇者になる為の訓練を父上につけて貰いましょう。元々ミユラー提督から教わっている座学はもとより体幹トレーニングも美子やフェリックス共々欠かした日はありません。後は応用です。

「お休みなさい父上。」

「はい。良い夢を御覧になって下さい歩実様。」

明日も皇太子として頑張ります！